

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 177, 2017

## VIEW 展望

文化として映画を研究すること／小川順子…2

## INFORMATION 学会組織活動報告

総務委員会…3 研究企画委員会…3 機関誌編集委員会…4

支部・研究会だより 東部支部…4 アナログメディア研究会…5 映像テキスト分析研究会…5 映像表現研究会…6 中部支部…7 ショートフィルム研究会…8

西部支部…9 関西支部…9 会員研究テーマ…13-17

日本映像学会第43回大会第2通信…18

## REPORT 報告

関西支部第79回研究会「1940～1960年代の特撮作品におけるアトラクション性をめぐる考察」／真鍋公希…10 「映画『東京の女』（1933）に現れる近代女性像の描写—スタイル分析を中心に—」／関スラ…10 2016年ジャン・ミトリ賞を岡島尚志会員が受賞／小松弘…11

## CONFERENCE 日本映像学会第42回大会報告【2】

### 【研究発表】

須藤健太郎／ジャン・ユスターシュによる映画史—『ナンバー・ゼロ』における形式の発明を中心に…11

落合賢一／放送用VTRテープの保存状況—2インチVTRを中心に…12

河合明／世界の電子自己出版—その課題と展望…12

## FROM THE EDITORS

編集後記…18

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第177号」2017年1月1日発行

発行人：武田潔 編集担当／総務委員会：奥野邦利（委員長）・橋本英治（副委員長）・

前川修・岡島尚志・板倉史明

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内

phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8209 / e-mail：JASIAS@nihon-u.ac.jp

<http://jasias.jp/>



日本映像学会

# 文化として映画を研究すること

小川 順子

筆者は日本文化研究の対象として日本映画の研究を行っている。とりわけ時代劇映画を中心に研究が進まない。なぜならば、時代劇映画は隣接する諸芸術ジャンルや武術などと密接な関係にあるだけではなく、時代劇映画が描いてきたのは、髷をつけた現代でもあるからだ。最近、痛感しているのが、よく指摘されている時代劇映画制作の際に必要な技術継承、そして知識／教養の継承が難しくなっていることである。そのためには、いかにして大量の時代劇映画が製作されていたかをきちんと知る必要がある。そこで最近、殺陣師のみならず日本映画の黄金期を支えた映画人たちへの聞き取りを行っている。

映画人への聞き取りは、別に珍しいことではない。これまで多くの人が聞き取り調査を行い、その成果が刊行されている。しかし、聞き取り／インタビュー対象者は監督や有名な俳優が中心であり、次にカメラマン、美術監督が多い。だが、映画を支えているのは彼らだけではない。映画を制作する現場のスタッフが多数いることはもちろんのこと、プロデューサー、宣伝、営業、興行主、そして観客などがいて初めて映画は成り立つ。そのような当たり前のことにもかわらず、実際はその一端しか理解していないのではないだろうか。

もちろんそのような思いを持っている人は数多くいる。ここ数年、映画に関わる様々な職種の人の自伝、聞き書き、対談、聞き取り調査に立脚した研究の増加がその証左であろう。映画が娯楽であるゆえに、映画研究への理解がなかなか進まなかった時期があるように、現場の人への聞き取りの結果は、現場の裏話や観客の立場では知り得ない興味深いエピソードであり、誤解を恐れずに言えば一種のワイドショー的な好奇心の対象でしかないと思われる節があると考えている。しかし、それは大きな誤解である。聞き取り調査はその時代を生きた人の証言であると同時に、その時代が有した文化の一端を知ることでもあり、その時代では当たり前で共有されていたことを知ることもである。そして聞き取りを行っている者たちに共通する思いは、「今、聞いておかない」という焦りではないだろうか。

一例をあげたい。筆者の拙い経験談だが、殺陣師の上野隆三氏に聞き取り調査を行った時のことである。上野氏の名前がクレジットされた以後の作品については、なるべく把握できる限りの作品を見直し、事前準備をしてインタビューに臨んだ。しかし、実際に、入社されてからの話を聞いていると、それだけではないことがわかってきた。殺陣師に転向したのちしばらく助手の期間がある。その頃は東映時代劇映画もまだまだ勢いのある時で、クレジットに記されるのは足立伶二郎氏、上野氏の師匠にあたる。しかし、話を聞くと、クレジットに名前が出ていなくても実際は上野氏を含む幾人もの殺陣師が映画を分担し、殺陣の手を付けていることがわかった。作品だけ観ていては、その体制は知る由もない。また、監督の演出との兼ね合いなどを聞いても、チャンバラシーンになると一切任せてし

まう監督もあれば、一緒に考える監督もいる。殺陣も演出なのであり、アイデアは総合的に生まれている。殺陣をどう見せるかは、当然構図と関わってくるために、カメラワークと密接に関係する。また、照明も殺陣を見せるための大きな要素である。殺陣に必要な得物を含む小道具や、所作も殺陣師は熟知していなくてはならない。もちろん美術、大道具、小道具、衣装など担当はそれぞれいて、現場でそれらを実際に俳優に持たせたり、衣装を整えたりするのは助監督の仕事のうちであるということは、これまでの先行研究の知識として理解していたが、大量生産時代は分業が成り立ちつつも互いに補い合い、それぞれが熟知している必要があることが見えてきた。そうすると、聞き取りの最中に名前が挙がった人に話を聞き取らなくなってくるし、聞き取る必要性を感じる。が、すでに手遅れという場合が多い。悔やまれてならない。

また、当然のことながら殺陣師の仕事は時代劇映画だけではない。現代劇における格闘や喧嘩のシーンなども殺陣師が手を付ける。そして映画産業の斜陽と共にテレビの仕事が増加する。殺陣師の出自が舞台である事から舞台(演劇)の殺陣の仕事も古くから並行で行われてきている。時代劇映画だけの知識では、相手から話を聞き出すことはできない。冒頭で、髷をつけた現代であると述べたように、同時代の出来事、流行(風俗)、話題となった映画(邦画に限らず)を含む芸能・芸術などが、アイデアとして盛り込まれている。聞き取りをする相手が高齢になればなるほど、今の筆者でさえそうだが、作品名や人名、出来事などがずっと言葉にできない場面に遭遇する。その時に、こちらから具体的な言葉で「この事ですか」と提示すると、さらに深い話を聞くことはできるし、こちらがわからなければ、そこで終りである。また、インタビュー後にテープ起こしをすれば終了というわけではない。人間の性として、記憶が作り変えられることも多い。また、誰だって言い間違いはある。すべてを鵜呑みにはできず、事実関係との照合をしていく必要がある。とても筆者の浅薄な知識だけでは賄いきれないことが多々ある。そこで、数年前から、同じような意志を持った研究者たちと共同で聞き取りの準備、実際の聞き取り調査、事後の確認を行うことにしている。それぞれの関心領域の差異が補完し合うことにつながると考えたからである。

いきなり全体像を掴むのは難しいため、切り口を定めつつ、小さなところから研究を進めていかなければならないのは当然である。しかし、それらをいつかは統合していきたいという思いを念頭に置くか否かで見えるものは変わるのではないだろうか。つまり、文化として映画を研究することは文化全般を研究することであり、筆者にとってその道のりは長く険しい。映画をめぐる様々な状況に関わっている人々の話を聞くことで、少しでも映画が製作されてきた時代特有の空気や文化を理解できればと思っている今日この頃である。精進あるのみと己に言い聞かせながら。

(おがわ なおこ／中部大学)

## 総務委員会

奥野 邦利・橋本 英治

### 報告と計画について

総務委員会では、第4回、第5回委員会が以下のように開催されました。ここでは委員会報告とその後の対応についても併せて報告します。

#### 第4回総務委員会

日時：2016年10月1日（土）13時半～14時半

場所：早稲田大学戸山キャンパス 33号館6階 第11会議室

出席：奥野邦利、橋本英治、板倉史明、前川修

※オブザーバー出席 武田潔、遠藤賢治

議案と討議された内容は以下のとおり。

##### 1) 予算執行状況の確認について

2016年6月～9月の予算執行状況を報告した。収入の部では予定している新入会員がやや少なく懸念されるが、支出の部とのバランスは概ね取れていることを確認した。

##### 2) 第43回大会の準備状況

これについては、板倉史明委員より現状の報告があり、会報176号（前号）にて第一通信のお知らせ済み。

##### 3) 新版会員名簿に関する件

年末発行予定の2016年版会員名簿作成のため、会員に向けたアンケートの実施について確認した。

##### 4) 会報について

大会報告号ということで校正作業等に時間が掛かり、第176号（前号）ペーパー版の納品が1週間ほど遅れることを確認した。また、今後もWEB版への投稿原稿を推進する方針を確認した。

##### 5) その他

前期総務委員会からの引継ぎである、ホームページのさらなる活用の検討を続ける方針を確認した。

#### 第5回総務委員会

日時：2016年12月17日（土）13時半～14時半

場所：早稲田大学戸山キャンパス 33号館6階 第11会議室

出席：奥野邦利、岡島尚志、板倉史明、前川修

※オブザーバー出席 武田潔、遠藤賢治

議案と討議された内容は以下のとおり。

##### 1) 予算執行状況の確認について

2016年10月～11月の予算執行状況及び、会計士による中間チェックを終えたことを報告した。収入の部では依然として予定している新入会員がやや少なく懸念され、支出の部とのバランスでは会費未収入金の改善を確認した。

##### 2) 第43回大会の準備状況

これについては板倉史明委員より、実行委員会として会場の確認及び、運営方針についての報告があった。また、第二通信の発行、研究企画委員会による大会発表の事前審査についても確認を行った。

##### 3) 新版会員名簿に関する件

年末発行予定の2016年版会員名簿は、各所確認作業に遅滞が生じ、年明け配布になる可能性を確認した。

##### 4) 会報について

第177号（今号）の発行については、12/15を原稿締切りとしているが、委員会報告を併せて柔軟に対応することを確認した。また、大会報告原稿の未着分一名については、今一度追跡することとした。

##### おわりに

理事会の折にも、学会MLの運用について審議を行い、大学院博士課程の公開論文審査の情報については、ホームページの活用で対応する方針が承認されました。ホームページの活用については、前期総務委員会からも引継ぎ事項として上がっており、橋本副委員長とも相談しながら改善をしていきたいと考えています。

（おくのくにとし／総務委員長・日本大学芸術学部  
はしもと えいじ／総務副委員長・神戸芸術工科大学）

## 研究企画委員会

鳥山 正晴

### 1) 研究企画委員会開催

研究企画委員会が下記の日に開催されました。

#### ・10月1日（土） 於：早稲田大学

この会議では、前研究企画委員会からの引き継ぎ事項の確認、および今期の研究企画の方針などについて討議しました。

#### ・12月17日（土） 於：早稲田大学

この会議で討議された主な内容は以下のとおりです。

- ①応募された新規研究会申請について
- ②2017年度研究会活動費助成の公募について

#### 2) 新規研究会の承認について

今期、以下の研究会が12月17日開催の研究企画委員会を経て、同日行われた理事会において承認され、映像学会研究会として加わることになりました。

研究会名：メディアアート研究会

代 表：関口敦仁

所属支部：中部支部

メディアアート研究会の今後の活発な活動を期待しております。

尚、その他既存の研究会の活動につきましては、ホームページの研究学会のページをご覧ください。（URL: [http://jasias.jp/study\\_group](http://jasias.jp/study_group)）

#### 3) 2017年度研究会活動費助成の公募について

●研究会活動費助成を以下の要領で公募いたします。

2017年度、本学会は映像に関する研究・活動の活性化を図るために、研究会が企画・運営する研究活動に対して研究会活動費助成の公募をします。有意義と期待される研究活動や、継続的な研究活動を続けている研究会、および新規発足の研究会による研究活動の奨励を目的としたものです。

応募された「研究会活動費助成申請書」については審査委員会による研究・活動計画内容、実施の実現性などについて厳正な審査のうえ、助成対象となる研究・活動計画を決定します。

●応募期間：2017年2月1日～3月31日

●応募資格：各支部に所属する研究会の代表者

●公募内容：研究会が企画・運営する研究会活動費として以下の2種の助成金を交付します。企画内容に沿ってどちらかを選択し応募してください。ただし、応募状況により予算額の調整を行なう場合があります。また予算額Aについては上映会場費や作品賃借料などを含むものとします。（作品賃借料については会員の作品は含まない）

予算額A：¥150,000以内（2件程度）

予算額B：¥80,000以内（3件程度）（総額¥500,000程度）

●審査結果の通知：2017年5月中旬

●助成金の交付：審査結果にもとづき助成金額を通知します。原則として年度末に領収書と引き換えに交付します。事情により事前の交付についても柔軟に対応する用意があります（総務扱い）。

●研究会活動の結果の報告書の提出：年度末3月31日まで（学会報、大会などでの公表）

●研究会活動費の運用についての報告：年度末3月31日まで（総務へ提出、理事会にて審査）

\*なお、申請内容と実際の活動に食い違いが生じたものや、実施できなかったものについては、理由の報告や助成金の返還を求め場合があります。

#### ◎「研究会活動費助成申請書」について

応募する研究会の代表者は記入票（研究会活動費助成申請書.xls）及び予算案を学会ホームページ（<http://jasias.jp/archives/3614>）よりダウンロードし、必要事項を記入のうえメールにて映像学会事務局・研究企画委員会宛に送ってください。（電子メールの場合の送信先アドレス：[jasias@nihon-u.ac.jp](mailto:jasias@nihon-u.ac.jp)）

\*「研究会活動費助成申請書」の記入内容については記入票をご覧ください。

以上

（とりやま まさはる／研究企画委員長、日本大学芸術学部映画学科）

Image Arts and Sciences 177 (2017) , 4

## 機関誌編集委員会

長谷 正人

(1) 『映像学』97号に関しましては、9月15日の締め切りまでに15本の論文が投稿されました。厳正な査読の結果、そのうち4本の論文が採択されました。現在、鋭意編集作業が進められており、1月中には発行できる見通しです。しばらくお待ちください。

(2) さらに『映像学』98号の編集作業も平行して始まっています。96号より偶数号のみ英語論文の投稿を受け付けることになっておりますが、11月25日の締め切りまでに2本の投稿がありました。現在編集委員会で査読中です。なお日本語論文につきましては3月15日締め切りで受け付けておりますので、会員諸氏に置かれましては振って投稿されますようお願いいたします。

(3) なお前会報でも書きましたが、今期編集委員会担当の最終号は、記念すべき100号になります。編集委員会としては、基本的には通常通りの査読論文を中心にしたものとして構成したいと考えていますが、節目としてできることがあればとも考えていますので、アイデアがあればお寄せ下さい。

(はせ まさと／機関誌編集委員長、早稲田大学文学学術院)

Image Arts and Sciences 177 (2017) , 4

支部・研究会だより  
東部支部

鳥山 正晴

1) 10月1日理事会後、第22期(2016-2017年度)の第1回目の幹事会を開きました。この会議でかねてから懸案だった規約の改正について討議し、一部改正を行いました。改正の主な変更点は次のようなものです。

第3条 幹事会は、日本映像学会理事のうち、東部支部所属の者及び、日本映像学会東部支部研究会の代表者によって構成される。

東部支部幹事会は、以前の規約では、「日本映像学会理事のうち、東部支部所属の者によって構成される」というものだったのですが、これからは、東部支部所属の理事、及び、東部支部所属の研究会の代表も幹事となります。

2) 11月26日2016-2018期第2回目(規約改正後第1回目)の幹事会を日本大学芸術学部江古田校舎で開きました。この会議では、「東部支部研究会の取り扱いについて」「東部支部開催の企画の計画について」で話し合われました。

「東部支部開催の企画の計画について」については、今後、研究会共同の企画や、各映像関連団体との共催企画などがあれば、東部支部に相談していただき、可能なものは東部支部の企画、または共催・協力企画とします。目安として開催計画日のおよそ一ヶ月半(45日)くらい前までに相談していただければ、1週間程度のうちに幹事会で相談し可否を決定すること。年2回を限度とすること、となりました。

予算としては、「東部支部研究費の取り扱いについて」に準じます。

3) 11月26日日本大学芸術学部江古田校舎において、コラボラティブ・カタログング・ジャパン (CCJ) と日本映像学会東部支部の共催で「日米のオルタナティブ・映像アーカイブの成り立ちと現在の方向性」を開催しました。

第一部は、ニューヨーク大学映像保存学科 (NYU MIAP) のモナ・ヒメネス氏 (Professor Mona Jimenez) と、東京国立近代美術館フィルムセンターのとちぎあきら氏による講演と対談を行いました。ヒメネス氏は「アメリカにおけるインディペンデント・メディア&フィルム保存」、とちぎ氏は「東京国立近代美術館フィルムセンターにおける『オルタナティブ映像』保存への取り組みと課題」と題しプレゼンテーションを行い、その後対談となりました。

Image Arts and Sciences 177 (2017) , 4

支部・研究会だより 東部支部



午前に行われた、ヒメネス氏ととちぎ氏による対談

第二部は、「コミュニティ・アーカイブ・ワークショップ (CAW)」として、映像作品をカタログ化するノウハウについてのワークショップを行いました。まず、ヒメネス氏からフィルムとビデオの基本について説明がありました。また、今回のワークショップに作品を提供していただいた映像作家の中嶋興氏からは、氏の作品について説明があり、その後、ワークショップに移りました。14名の参加者は3班に分かれ、フィルムとビデオテープを分類し、カタログ化する作業を体験、意見交換などを行いました。



午後のワークショップについて説明するヒメネス氏



ワークショップでのカタログング作業の様子

以上

(とりやま まさはる／東部支部担当常任理事、  
日本大学芸術学部映画学科)

東部支部

# アナログメディア研究会

西村 智弘

## 【主催活動】

### ①「え？実験映画はアートじゃなかったの？」

日時：9月17日(土) 15:00-  
会場：阿佐ヶ谷美術専門学校  
521 教室  
トーク：とちぎあきら(東京国立  
近代美術館フィルムセンター)×  
七里圭(映画監督)×西村智弘



アナログメディア研究会と「charm point」の提携企画として、連続講座「映画以内、映画以後、映画辺境」第四期：「え？実験映画はアートじゃなかったの？」を開催し、トークとフィルム上映を行った。上映した作品は、1960～70年代のアメリカの実験映画である(16ミリフィルムで上映)。上映後のトークでは、今日における実験映画の位置づけ、実験映画と美術の関係、フィルム作品のあり方などについての議論が行われた。

上映作品：オスカー・フィッシンガー『ラジオ・ダイナミクス』(1942)、ブルース・コナー『A MOVIE』(1958)、ブルース・ベイリー『オール・マイ・ライフ』、ジェームス・ホイットニー『ラピス』、ジョージ・ランドウ『エッジ・レタリング、ごみ、スプロケット穴などが現れるフィルム』(いずれも1966)、フランク&キャロラン・モリス『CONEY』(1975)  
なお、当企画につきまして開催案内の未送をお詫びします。

### ②「ヒカルオンナ -The Luminous- 実験映画の女たち 女性フィルムメーカー特集」

日時：11月23日(水)  
会場：アップリンクファクトリー



2015年11月28日に開催した「ヒカルオンナ -Les femmes brillantes- 実験映画の女たち 女性フィルムメーカー特集」の第二弾として、女性作家による実験映画の特集上映を行った。前回はフランスを中心としたプログラムと日本のプログラムであったが、今回はアメリカのプログラムと日本のプログラムである。昨年と同様、アナログメディア研究会の徳永彩加が企画を担当した。アメリカの作品の選出は、ニューヨーク在住の映像作家・キュレーター西川智也氏に依頼した。上映後に、西川氏による作品解説、出品作家

を含めたトークを行った。

A プログラム [-kotohana- 異花]：黄木可也子『ひかりつむぎ』(2012)、早見紗也佳『このところの』(2016)、園田枝里子『鍵』(2005)、徳永彩加(会員)『余燼』(2016)、狩野志歩『Lily in the Glass』(2003)、松山由維子『花』(2004)、村岡由梨『スキゾフレニア』(2016)、しらくまいこ『歯のないウサギ』(2004)、黒川通子『蝶とドラゴンの話』(2016)、鈴木香里『虚空の為のリリズム』(2010)

B プログラム [Colors in Life, Shadows of Style]：Alexandra Cuesta『Recordando El Ayer』(2007)、Vera Brunner-Sung『Minong, I slept』(2010)、Mary Helena Clark『Sound Over Water』(2009)、Jodie Mack『Razzle Dazzle』(2014)、Karen Johannesen『Light Speed』(2007)、Laida Lerxundi『Vivir para Vivir / Live to Live』(2015)

### ③「フランス・フィルム映像の今」(次号会報にて報告予定)

ゲスト講師：ダヴィッド・キッドマン(映像作家、トゥール美術大学教授)  
日時：12月22日(木) 18:00-20:00  
会場：阿佐ヶ谷美術専門学校 521 教室  
ダヴィッド・キッドマンのフィルム作品上映、およびフランスにおけるフィルム映像の現状についてのレクチャー。

### ④奥山順市特集上映(予定)

以前から計画されている札幌での上映会。会場と交渉中であり、日程は未定である。

## 【協力活動】

### ①「8mm ミリフィルム撮影→現像ワークショップ」

9月10日(土)と25日(土)、京都の「おもちゃ映画ミュージアム」で行われた8ミリフィルムによるワークショップ。

### ②フィルムワークショップ&フィルム・インスタレーション

8mmFILM 小金井街道プロジェクト主催によるフィルム・ワークショップ、および11月5日(土)と6日(日)「第28回武蔵野はらっぱ祭り」で行う映像インスタレーションの野外展示。

### ③「変わる日常/湧出するドラマ:現代アメリカン・アヴァンガード傑作選」

11月22日(火)、西村智弘・金子遊編『アメリカン・アヴァンガード・ムーヴィー』(森話社)の刊行記念特別上映プログラムとして行われた上映会(会場：アップリンクファクトリー)。上映後に、西川智也、西村智弘、金子遊によるトーク「アメリカン・アヴァンガードは何をもたらしたのか？」が行われた。

### ④「ODAWARA ワークショップ2016」の映像ワークショップ

11月26日・12月3、10日、太田曜が行った8ミリ映画の撮影、現像、編集のワークショップ(会場：小田原宿なりわい交流館2階)。

以上  
(にしむら ともひろ/アナログメディア研究会代表)

東部支部

# 映像テキスト分析研究会

藤井 仁子

10月1日に開催された2016年度第4回理事会において中村秀之会員から藤井への代表交替が承認されました。中村会員は引きつづき木村建哉会員、長谷正人会員とともに研究会の運営にあたります。発表を希望される場合、上記4名のいずれかにお届出いただくという従来からの手順に変更はございません。

本研究会の特色は、特定の映像テキストの分析をめぐって、発表者と参加者としてたつぷりと時間をかけた議論の場を共有できる点にあります。論文を準備中の発表者にとっては刺激的な意見交換の機会になることでしょう。多くの会員のご参加をお待ち申し上げております。

次回研究会は2017年3月4日(土)の開催を予定しています。詳細は追ってお知らせいたしますが、現在のところ藤井が『未知との遭遇』(スティーヴン・スピルバーグ、1977)について発表することになっていきます。

(ふじい じんし/映像テキスト分析研究会代表、早稲田大学文学学術院)

東部支部・関西支部

## 映像表現研究会

伊奈 新祐・奥野 邦利

報告と計画について

第10回となる「インターリンク：学生映像作品展：ISMIE (Interlink= Student's Moving Image Exhibition) 2016」を11月20日に「KINO-VISION 2016」(旧：京都メディアアート週間)のプログラムとして京都上映会 (in Lumen Gallery) を東京会場 (12月10日、11日) に先行して実施しました。

今回は全国19校の映像メディア系大学及び専門学校の学生作品を、会員による推薦をもって上映しました。

＜参加校＞ 阿佐ヶ谷美術専門学校映像メディア科 / イメージフォーラム映像研究所 / 大阪芸術大学 芸術学部 / 九州産業大学 芸術学部 / 京都精華大学 芸術学部 (2016年度幹事校) / 久留米工業大学 情報ネットワーク工学科 / 尚美学園大学 芸術情報学部 / 情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] / 成安造形大学 / 宝塚大学 東京メディア芸術学部 / 玉川大学 芸術学部 / 東京工芸大学 芸術学部 / 東京造形大学 / 東北芸術工科大学 映像学科 / 名古屋学芸大学 メディア造形学部 / 日本大学 芸術学部 (2016年度幹事校) / 文京大学 メディア表現学科 / 北海道教育大学 / 武蔵野美術大学 造形学部

また今後、代表作の中から各校の推薦教員による投票によって「ISMIE2016 学生選抜作品集 DVD」の作成を行い、次回大会にて報告を予定しています。

＜京都会場＞ 日程：11月18日 (金)・19日 (土)・20日 (日)  
会場：Lumen Gallery (「KINO-VISION 2016」プログラム)

昨年より旧称「京都メディアアート週間」から、「KINO-VISION」として開催している上映会のプログラムとして「ISMIE 2016」を実施しました。他のプログラムは、恒例となった日本アニメーション学会等が共催による「ICAF2016」から「各校選抜プログラム」と「ICAF実行委員会セレクション (京都版)」、そして毎年会場であるLumen Galleryで夏に行われている映像の公募展「Video Party」(由良泰人会員 (大阪成蹊大学芸術学部) 企画) のセレクション・プログラムを上映しました。

詳しい上映作品については、以下のホームページを参照して下さい。  
＜ <http://www.kyoto-seika.ac.jp/kino/2016/index.html> ＞

「ISMIE2016 “各校代表作プログラム”」上映後には、参加校の推薦教員である3会員「竹林紀雄 (文教大学) + 前田真二郎 (IAMAS) + 伊奈新祐 (京都精華大学)」によるミニトーク・セッションを行いました。出品学生 (IAMAS) の紹介後、それぞれ上映作品の印象など意見交換を行いました。



「ISMIE2016 “各校代表作プログラム”」上映後のミニトーク・セッションの風景 (左から竹林+前田+伊奈)

今回、「ISMIEのプログラム」では、参加者は約40名弱でしたが、3日間で合計約190名の参加者があり、昨年より微増となりました。「ICAFのプログラム」と一緒にプログラムを組むことにより、全国の学生による短編作品&アニメーション作品の優秀作を一望できる良い機会となっていると思います。次の写真は、「ICAFのプログラム」後のミニトーク・セッション「季里 (女子美術大学) + 米正万也 (会員：アニメーション作家) + 伊奈」の様子です。



「ICAF2016 “各校選抜プログラム”」上映後のミニトーク・セッション風景 (スクリーン前、左から季里+米正+伊奈)

(伊奈新祐)

＜東京会場＞ 日程：12月10日 (土)・11日 (日)  
会場：日本大学芸術学部江古田校舎大ホール

今年度の東京会場は幹事校の都合により、例年の10月を変更して12月に開催しました。

12/10 (土) は、13:30～16:30に各代表作品 (10分2作品以内) の2プログラムに分けて上映し、17:00～18:30には作品推薦教員による公開ディスカッション「スクリーンの系譜学+α」を実施しました。伊奈新祐会員 (映像表現研究会代表) による基調報告に続いて、提供された話題に沿ったラウンドテーブルでのフリートークの形式を取りました。

司会：奥野邦利 (日本大学)、参加者：伊奈新祐 (京都精華大学)、李容旭 (東京工芸大学)、伏木啓 (名古屋学芸大学)、須藤信 (久留米工業大学)、野村建太 (日本大学)。

前回までは壇上でのパネルディスカッションの形で進めていたのですが、もう少し研究会として生の対話をすべきとの伊奈研究会代表からの提案に対応しました。尚、公開ディスカッションの報告は次回会報にて行います。



「ISMIE2016 “公開ディスカッション”～スクリーンの系譜学～」の風景 (スクリーン前、奥から時計回りで伊奈+奥野+李+野村+須藤+伏木)

12/11 (日) は、12:00～17:45に各校25分以内で推薦された全作品をA～Dの4プログラムで上映しました。両日の入場者数は約100名。詳しい上映作品については、以下のホームページを参照して下さい。

＜ [http://d.hatena.ne.jp/e\\_h\\_kenkyu/](http://d.hatena.ne.jp/e_h_kenkyu/) ＞

(奥野邦利)

以上  
 (いな しんすけ / 映像表現研究会「西部会」代表、京都精華大学芸術学部)  
 (おくのくにとし / 映像表現研究会「東部会」代表、日本大学芸術学部)

## 支部・研究会だより 中部支部

伏木 啓

### ◎中部支部報告と計画について

中部支部では、2016年度第2回研究会を、相山女学園大学にて下記の通り開催しました。

2016年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第2回研究会

日時：2016年12月03日(土) 14:00～17:15

会場：相山女学園大学 星ヶ丘キャンパス

相山女学園大学文化情報学部棟 319室

(〒464-8662 名古屋市中種区星が丘元町17番3号)

### ◎講演

街と子どもと映画～映画の力が街と人を育てる～

土肥悦子氏 | (有)シネモンド代表 / 子ども映画教室代表

講演の要旨：

①映画がスクリーンにかかるまでの、制作配給興行の流れの話、および宣伝の話

②地方におけるミニシアター設立および運営の話

③小学生を対象に、さまざま映画に関するワークショップを開催し、また、シンポジウムや学校とのコラボレーションなどを実践している、子ども映画教室の活動および、映画教育についての話

### ◎研究発表(3件)

東映ポルノと女性—1970年代の日本映画とジェンダー・ポリティクス  
王温懿(おう おんい)氏 | 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程  
要旨：映画史において70年代の日本映画における二大テーマが暴力とセックスであったことは、すでに論じられている通りである。だが、これまでの研究では、東映ポルノは単なる大衆娯楽映画として見なされ、その研究的価値が看過されてきた。実際には、東映ポルノは、暴力と性を融合させる、戦うポルノ女優の身体を表象している点で、ジェンダー・ポリティクスに関わる重要な問題を提起している。

本発表では、当時の映画産業的な背景と社会的な背景を考察した上で、70年代の「表現の自由」論争の論理を明らかにしながら、東映ポルノが父権社会の歴史において無化される力学がいかにか発生してきたのかを論証する。さらに、70年代のウーマン・リブが掲げた「性の解放」に対して、東映ポルノが重要な材料となり得る可能性がありながら、それが見過されてしまったことを検証する。東映ポルノを仔細に分析すると、家父長主義的な性的規範に対して異議を申し立て、自己と他者の関係性を見直し、自身の性的主体性を自覚する女性像がそれらの作品群の表象上の特徴として明らかにできるが、この女性像が示唆する重要な問題が70年代のリブ派フェミニズムでは看過されてしまっていた。

境界を越える音—『クロユリ団地』の音響をめぐる

今井瞳良会員 | 茨木市立川端康成文学館学芸員

要旨：日活創立100周年記念作品としてオリジナル脚本をもとに製作されたホラー映画『クロユリ団地』(中田秀夫監督、2013年)は、前田敦子演じる二宮明日香が口ずさむ鼻歌がそのままエンディング曲へと繋がっていき、幕を閉じる。このメロディは、タイトルがインサートされる冒頭をはじめ、作中で何度も流れるメインテーマであるが、通常映画音楽は物語世界外に属しており、物語世界内の明日香にこのメロディは聞こえていないはずである。聞こえていないメロディを明日香が口ずさむことによって、物語世界の境界が曖昧になっているのだ。

本発表では、ミシェル・シオンが提起した音響の三分法である「イン」(音源が物語世界内にあり画面内に位置している音響)、「フレーム外」(音源が物語世界内にあり画面外に位置している音響)、「オフ」(物語世界外の音響)に基づいて、『クロユリ団地』における音を分析する。作品の主な舞台となる団地において視覚・聴覚の物理的な境界となるコンクリートの壁を使った音の演出や、物語世界の境界を曖昧にするメロディなどの音響設計における明日香の位置付けを通して、Jホラーにおける女性表象を検討してみたい。

作品「syncdonII」について

伊藤明倫会員 | 名古屋市立大学研究員

高橋一誠氏 | 筑波大学研究員

要旨：体験型インスタレーション作品「syncdonII」について発表する。体験者の心拍同期現象を意図的に誘導する事で成り立つ本作品が、どのような考えで生まれたのか、システムとコンセプトの両軸から解説する。

### ◎報告

第2回研究会は、土肥悦子氏による「街と子どもと映画～映画の力が街と人を育てる～」の講演よりはじまった。



土肥氏は、映画配給興行会社「ユーロススペース」にて映画の買付け、宣伝を担当したことが映画に関わる最初のキャリアとなったとのことであった。結婚を機に、石川県金沢市に移住した際に、文化都市であるにも関わらず多様な映画を観られる環境ではないことに気がつき、1998年、金沢市にミニシアター「シネモンド」を開館した。さらに、2004年には「子ども映画教室」をはじめた。(当初は金沢ではじまったが、現在は全国的に活動を展開させている。<http://www.kodomoeiga.com/>) 子ども映画教室は、「視覚玩具の工作」「映画鑑賞」「映画制作」の3つの要素があるとのことであった。「映画鑑賞」では、低学年の子どもにとって理解の難しい作品も上映しているという。しかし、映画は全部わからなくても良いのであり、大人は特に説明しないようにしている。すると、自ずと高学年の子どもが説明するようになり、子どもたちのなかで自主性が芽生えるようになるという。「映画制作」においても、導入こそ担当した講師(映画監督)のレクチャーからはじまるものの、実際の制作に関しては、大人たちは周囲にいてサポートするだけで、子どもたちの自主性にまかせ、基本的には何も言わないようにしているとのことであった。それらの記録映像を観ると、確かに子どもたちが自ずから「気づき」、映画制作を通して他者との協調などさまざまなことを学んでいる様子を感じることができた。子ども映画教室にて試みられていることは、大学以降の映画教育につながるものであり、また公教育の一環として「映画」を導入することの意義も感じさせるものであった。

その後の研究発表は、3件あった。

王温懿氏の「東映ポルノと女性—1970年代の日本映画とジェンダー・ポリティクス」は、娯楽映画として見做されていた東映ポルノ(ピンク映画)に対し、同時代のウーマンリブと重なる眼差しがあったことを投げかけ、ジェンダー・ポリティクスに関わる新たな研究の可能性を見出す試みであった。今井瞳良会員による「境界を越える音—『クロユリ団地』の音響をめぐる」は、映画における「団地」研究を発展させたものであり、コンクリートの壁に隔てられた空間と音響演出の関係から物語世界内外の音へと言及し、新たな作品解釈へと導くものであった。伊藤明倫会員と高橋一誠氏の「作品『syncdonII』について」は、心拍センサーを活用したインタラクティブ・メディアインスタレーションの理論的背景と作品概要に関する発表であった。「贈与」を作品要素のひとつとしていながら、ラッピングされた箱の中身は空洞であり、但し過去の鑑賞者の心拍がその箱の振動を通して感じ取れるという、多義性の伴う作品であった。

### ◎今後の計画

2017年3月上旬に、愛知淑徳大学にて第3回研究会を予定しています。学生作品プレゼンテーションも開催予定です。参加をご希望の方は、支部事務局や幹事までご連絡ください。詳しくは、下記、中部支部HPをご参照ください。

<http://jasias-chubu.org/wp/>

以上

(ふしき けい / 中部支部担当常任理事、  
名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科)

中部支部

# ショートフィルム研究会

林 緑子・伊藤仁美

2016年度、ショートフィルム研究会は、下記2件を開催致しました。また、下記1件を開催予定です。

## 開催終了企画の事後報告

### 第17回活動

会期名 若手短編映像制作者交流会「tea time video: meeting vol.2」  
 期日 2016年9月25日(日) 15:00—17:30  
 来場者数 12名(参加作家5名、見学者5名、スタッフ2名)  
 内容 作家プレゼンテーション、ディスカッション、交流会  
 参加費 無料  
 会場 長者町トランジットビル  
 (〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦2-11-13)  
 企画 伊藤仁美  
 協力 N-Mark、深谷崎子  
 主催 日本映像学会ショートフィルム研究会  
 運営 日本映像学会ショートフィルム研究会、N-mark、深谷崎子  
 日本映像学会研究活動助成金対象研究  
 公式サイト <http://teatimevideo.strikingly.com/>



### 開催内容

- I. 参加作家プレゼンテーション
  - 益田朱梨(アニメーション)
  - ふいじこ(記録映像)
  - 所遥菜(インスタレーション)
  - 高木拓人(映像・インスタレーション)
  - 南篠沙歩(アニメーション)
  - 井藤雄一(映像音響)
- II. フリートーク&交流タイム

作家プレゼンテーション終了後、見学者の方やトランジットビルの方を交えてフリートークを行いました。第2回交流会では、様々な立場から作品制作の意義について意見を交わしました。また、今回の交流会では学生や社会人に加えて名古屋で活躍している作家の方も多く、それぞれの作家活動を「どのように継続していくか」についてディスカッションする機会となりました。

(報告者: 伊藤仁美<sup>まさみ</sup>)

### 第18回活動

会期名 名古屋フィルムミーティング2016  
 期日 2016年11月5日(土) 12時—17時  
 来場者数 延べ40名  
 内容 上映、ゲストトーク  
 参加費 無料  
 会場 愛知芸術文化センター12階 アートスペースEF  
 (〒461-0005 愛知県名古屋市中区東桜1丁目13-2)  
 主催 日本映像学会ショートフィルム研究会  
 企画/運営 名古屋フィルムミーティング実行委員会  
 日本映像学会研究活動助成金対象研究

### 上映作品

- A プログラム アニメーション(公募)
- 『トマトまるのみのうた』(2015年/1分30秒) 制作:こさきたん
  - 『Potori』(2014年/4分07秒) 制作:内藤日和
  - 『おちんちんの悩み』(2014年/1分22秒) 制作:香取剛
  - 『森の洞窟』(2013年/6分30秒) 制作:植田翔太

- 『おにぎりくん』(2013年/9分35秒) 制作:倉橋一平
- 『紙風船』(2016年/2分24秒) 制作:鎗香織
- 『夜を飛ぶ』(2015年/3分) 制作:さとうゆか
- 『おおきなしゅうかく』(2013年/50秒) 制作:はらだわかこ

### B プログラム 実写(公募)

- 『daughter』(2015年/9分58秒) 監督:たかせしゅうほう
- 『瓜二つ』(2015年/14分19秒) 監督:山川智輝
- 『だった人』(2016年/12分56秒) 監督:藤木裕介

### G プログラム 「自主制作とは、自主的に、他者と、作ること。」

ネットで情報が溢れ映像も均質化されている現在、地域で映像を制作するとはどういうことか。名古屋で自主制作を続ける酒井健宏監督をお招きし、ご自身の関わられた作品の上映を交えつつ、地域における映像制作の状況や活動の意義についてお話いただきました。  
 参考上映:『バイオレンスあわや』(2015年/10分) 制作:チームあわやさとの(名古屋芸術大学デザイン学部 MCD コース・2014年度「映像演習」課題作品・担当:酒井健宏)

### S プログラム 京都造形芸術大学芸術学部情報デザイン学科・大学院ビジュアルクリエイション領域 大西宏志教授ゼミ・修了制作選集

- 『からだにめーしょん』(2016年/3分05秒) 制作:中西綾
- 『唯人間』(2015年/3分) 制作:藤井有美子
- 『惧』(2015年/4分02秒) 制作:鄧小草
- 『新山海伝』(2016年/5分38秒) 制作:徐文龍
- 『パンダ城』(2015年/5分58秒) 制作:方葉舟
- 『拔塞大-BASSAI-DAL』(2015年/5分59秒) 制作:ヨルギウ・パノス
- 『Wolves』(2016年/5分13秒) 制作:井川萌
- 『Фаворитка Favoritka』(2016年/5分31秒) 制作:ジダーノフ・アリーナ
- 『お元気ですか?』(2015年/12分32秒) 制作:キム・ダンビ

第6回となる本上映会は、学生と一般の映像作品を公募上映し、東海地区を中心として映像文化を盛り上げかつ交流の場とすることを目的としている。今年度も公募などにより、特別上映作品を含む21作品が寄せられた。上映会では観客投票による観客賞を選出している。今回は、倉橋一平監督の『おにぎり君』と、鎗香織監督の『紙風船』の2作品を観客賞とした。特別上映は、京都造形芸術大学芸術学部情報デザイン学科・大学院ビジュアルクリエイション領域 大西宏志教授ゼミ・修了制作選集。

また、ゲストプログラムとして、酒井健宏監督による上映とトーク「自主制作とは、自主的に、他者と、作ること。」を開催。自主制作について、制作する意義や製作費の問題、地域性や発表の場について、来場者との意見交換を交えながら行われた。具体的には、制作することの楽しさとして、他者の役を演じるおもしろさ、撮影期間の非日常性などが挙がった。製作費のねん出については、クラウドファンディングの活用を紹介。また、地域で制作することに、自主制作映画の支援も行うNPO法人「独立映画鍋」の取り組みを参考事例として挙げた。最後に、発表の場として、上映会で観るのか、ウェブサイト上で観るのかにより、制作手法も違ってくるため、その出口を考え、どのように作るのかなど、地域で制作する上で大切な点を参加者全員で考える場となった。地域で自主制作映画に携わる来場者が多かったため、有意義な問題提起とモチベーションを高める場となった。

### 開催予定の企画概要

#### 第19回活動

会期名 若手短編映像制作者交流会「tea time video」展示上映  
 期日 2017年2月21日(火)—2月26日(日) 13:00—19:00  
 内容 展示、交流会  
 会場 タネリスタジオ(愛知県瀬戸市末広町1丁目35-1)  
 企画 伊藤仁美  
 主催 日本映像学会ショートフィルム研究会  
 日本映像学会研究活動助成金対象研究  
 主旨 学校や所属の枠を越え、若手短編映像制作者同士が、定期的に気軽に交流できる場を設ける。また、交流会のまとめとして、展示上映を開催し、作家と鑑賞者が、交流しつつ作品鑑賞をする場を設ける。その後、上映会や交流会以外においても、鑑賞者が作家を知る端緒として、一連の記録をまとめた冊子を広く配布する。  
 公式サイト <http://teatimevideo.strikingly.com/>

以上  
 (はやしみどりこ/ショートフィルム研究会代表、  
 いとうまさみ/ショートフィルム研究会運営構成員)



## 支部・研究会だより 西部支部

黒岩 俊哉

西部支部報告と計画について

### 1) シンポジウムの開催

2016年11月4日(金)16:00～18:20に、九州産業大学17号館6階601教室にて、西部支部主催のシンポジウムを開催いたしました。テーマは「ドキュメンタリー映像—語られること語るべきこと」。パネリストに伊藤有紀監督(ドキュメンタリー映画監督)と川井田博幸氏(グループ現代・プロデューサー)を迎え、監督とプロデューサーという立場から、ドキュメンタリー映像の可能性(と限界)について、討議が繰り広げられました。ここでは、支部の会員や学生だけでなくドキュメンタリー携わる一般からの参加もみられました。質疑応答では、それらの方々からも鋭い質問が飛び出るなど、終了時間を超えてもお熱気は尽きませんでした。川井田氏の「普段仕事として考えていることも、(こうして)言語化することで、新たな一歩の一因となる」という言葉には、このシンポジウムが映像研究の、ひとつきっかけとなれたのではないかと感じました。なお、司会は黒岩が担当しました。



左から黒岩、伊藤有紀氏、川井田博幸氏

### (シンポジウムの趣旨)

映像はあたかもそこに事実があるように私たちに語りかける。しかしながらそこにある事実は、過去のとある現象を限られた視点から記録したものであることも、また事実である。ドキュメンタリー映像は、これらの過去のイメージの集合体を編集し構成することで、監督や作家のメッセージを形成する。それが監督や作家の本意であろうとなかろうと、ドキュメンタリー映像の重層的な意味と風景は、現実のメタファーとして観客に語られる。

今回のシンポジウムでは、福岡県八女市で活動を続けるドキュメンタリー映画監督の伊藤有紀氏と、映画プロデューサーの川井田博幸氏をパネリストに迎え、ドキュメンタリー映像の可能性と限界をそれぞれの立場からお話いただけます。またそれらを起点として、映像と人、ひいては映像とこの世界との関係性を本質的に考察します。

日時：2016年11月4日(金)16:00～18:00

会場：九州産業大学17号館6階601教室

(福岡県福岡市東区松香台2-3-1)

対象：日本映像学会会員、学生、一般

### 2) 支部活動計画

前号で、2016年度の研究会および支部総会を2016年12月10日(土)に、九州大学大橋キャンパスで開催することとしていましたが、発表者および会員のスケジュールの都合により延期することになりました。予定は2017年初旬ですが、できるだけ早々に幹事会を開き、期日と発表者を決定する予定です。会員の皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、詳細が決まり次第、追って告知いたします。

(くろいわ としや／西部支部担当常任理事、九州産業大学芸術学部)

## 支部・研究会だより 関西支部

豊原 正智

関西支部報告

既にご案内のように、関西支部第79回研究会が去る12月24日、大阪大学豊中キャンパスで行われました。押し迫ったクリスマス・イヴの日でしたが、一般の聴講者を含む多くの会員の参加があり、活発な研究会となりました。

発表は、既にご案内のように、京都大学人間・環境学研究科の真鍋公希会員による「1940～1960年代の特撮作品におけるアトラクション性をめぐる考察」と当番校から、大阪大学文学研究科の関スラ会員による「映画『東京の女』(1933)に現れる近代女性像の描写—スタイル分析を中心に—」でした。発表内容については、別掲(次ページ)に委ねますが、実に充実した発表と同時に多くの活発で率直な質疑応答が行われ、若手、ベテランの研究者から適切なアドバイスと問題点の指摘がなされ、新進気鋭の両発表者にとっては大変有意義な研究会となったのではないかと思います。

毎年度、この年末の研究会では、併わせて支部総会が開かれますが、そこで、平成28年度事業報告、同会計報告が行われ、平成29年度事業計画案が提案され、いずれも了承されました。事業計画では、既に決定している第80回研究会(平成29年3月4日、京都工芸繊維大学)の次の第81回研究会の当番校が大阪芸術大学に決まりました。また、日本映画の研究会であります第39回夏期映画ゼミナールにつきましては、京都文化博物館を会場に、9月1日(金)、2日(土)、3日(日)を予定しています。テーマに関しましては、一つの候補が「山田五十鈴生誕百年特集」として挙がりましたが、さらに検討することとなりました。終了後、恒例の懇親会が開かれ、大学近くの居酒屋で鍋をつつき、今年の関西支部の行事を締めくくりました。(文責 豊原正智)

### 日本映像学会関西支部第79回研究会

日時：平成28年12月24日(土)午後2時より

会場：大阪大学豊中キャンパス・文法経研究講義棟 文11(1F)

(大阪府豊中市待兼山町1-5)

研究発表1：1940～1960年代の特撮作品におけるアトラクション性をめぐる考察

発表者：真鍋公希会員(京都大学大学院人間・環境学研究科)

研究発表2：映画『東京の女』(1933)に現れる近代女性像の描写—スタイル分析を中心に—

発表者：関スラ会員

(大阪大学大学院文学研究科美学研究室博士後期課程3年)

・支部総会 午後4時30分～ 同会場にて

・懇親会 午後6時頃～ 会場：阪急「石橋駅」付近「源樹や」石橋店

以上

(とよはら まさと／関西支部担当常任理事、大阪芸術大学)

## 1940～1960年代の特撮作品 におけるアトラクション性を めぐる考察

真鍋 公希

本報告では、日本映画における特撮（特殊撮影）の映像的・技術的側面に焦点を当て、大きく二つの論点を提示し議論を進めることで、その受容のあり方を考察した。

第一の論点は、特撮のもつアトラクション性についてである。「アトラクション」とは、T. Gunning が明らかにした初期映画における非物語的な受容の側面を指す概念である。この「物語/アトラクション」という二対は多くの論者によって変奏され、これまでの映画史研究に大きな貢献を果たしてきたといえる。しかし、このように論じられてきた「アトラクション」は、物語映画へのオルタナティブという側面が強かったために、その中に多様な性質を混在させているのではないだろうか。この問いを検討するためにGunningの「アトラクションの映画」の分析を見ていくと、その特徴としてショックや驚きといった刺激の直接性が強調される一方で、それとは矛盾する反省性を伴った錯視への遊戯的な受容のあり方も記述されていた。そこで報告者は、この二つの差異を「同一化/客体化」と定義し、「アトラクション」概念を分節化することを提案した。この分節化によって特撮に関する言説を分析すると、一般的に想定されがちな特撮のスペクタクル（＝同一化）よりもむしろ、映像の仕掛けに対する注意（＝客体化）の方が、受容において重要な位置を占めていることが明らかとなった。

この分析を受けて、そのような仕掛けに対する注意が形成されてきた要因とはなにかという二つ目の論点を提起した。報告者が注目したのは、1940年代から存在していた特撮の技術を解説する新聞や雑誌の記事である。そこで、特撮技師にとっての技術解説記事がもつ意味と、受容者は実際に記事をどのように消費していったのかを検討した。円谷英二に代表される当時の特撮技師の映画制作における地位は、多くの対立関係を孕んだ困難なものであった。具体的には、経営者との経済的対立、監督・演出家との芸術的対立、そしてカメラマンとの職能的対立である。このような対立関係の中で、集団内での地位を上昇させるためには、技術水準の向上とともに、特撮を広く認知させ、社会的な承認を得る必要があったのである。したがって、特撮技師が積極的に技術解説を行ったのは、それによって消費を促そうというのではなく、第一義には集団内での承認をめぐる実践だったと理解できる。

他方で、『ゴジラ』（1954）以降、特撮を用いた作品が次第に増加したと同時に、技術解説記事が一般誌のみならず『週刊少年マガジン』などの子ども向け雑誌でも掲載されるようになっていった。子どもも含めた受容者は、このような記事を読むことと、映画/テレビを見ることを反復し習慣化することで、仕掛けに対する注意が形成してきたのである。このように、制作者と受容者のあいだにズレを含みつつも繰り返されてきた実践は、オタク文化に特徴的なコミュニケーションの自己目的化、永田大輔のいう「高文脈化」といった1980年代以降の大衆文化の動向に接続しうるものであると結論づけることができる。

（まなべ こうき/京都大学大学院人間・環境学研究所修士課程  
共生人間学専攻人間社会論講座社会行動論分野）

## 映画『東京の女』（1933）に 現れる近代女性像の描写 —スタイル分析を中心に—

関 スラ

### 発表目次

はじめに

1. 分析の前提：良妻賢母とモダンガール
  2. ナラティブの構造分析
  3. 映像分析 (shot by shot) —第1シーン中心に—
    - 3-1. フォーカスを利用した空間区分
    - 3-2. 鏡を利用した間接的提示
    - 3-3. 切り替えショットを通じたカメラアングルの位置関係
- 終わりに

発表者は現在「1930年代日韓映画における近代的女性像」をテーマに博士論文を準備中であり、発表をその一部分にあてる予定である。今回の発表では、小津安二郎監督の作品『東京の女』（1933）を直接の分析対象とし、ちか子というヒロインのキャラクターに「近代日本の女性像」がいかにか具現化されているかを明らかにするとともに、この素材を巡って小津独特のスタイルがどのように活用され、ナラティブな意味を創出してきているかを考察する。そしてこの映画が導こうとする意図、特にちか子に対する視線を把握する。

小津の様式的こだわりの中には共存と混在という主題が隠れている。強迫的に一貫性を維持したスタイルの特徴のため彼の映画は世の中の変化にさほど影響を受けていないように見えるのだが、実は世の中の変化と無関係ではなく、時にはとても敏感に反応している。これらを立証するために本発表では『東京の女』という作品をキャラクター、そしてナラティブの構造的分析和共にカメラスタイルを集中的に分析する。

本作品において、ちか子というキャラクターは近代女性像の三つの姿を全てあわせ持っている。第一に、家庭（私的空間）内で弟を社会的に有為な人材へと育てるために愛情を惜しまない、典型的な良妻賢母の顔。第二に、会社（公的空間）では資本主義社会を支える、労働主体としてのモダンガールの顔。第三に、バー、カフェ、夜間という境界領域において酒と身体を売る、性的な消費対象としてのモダンガールの顔。お金を稼ぐ行為の目的は弟を社会に出させるためであり、ここでも良妻賢母の役割とモダンガールのステイタスは不可分に連動している。

ボードウェルは本作に「新派の雰囲気と溝口の『滝の白糸』（1934）の名残り<sup>1</sup>」を読みとり、ヒロインの女性像を伝統的な「女侠」のそれに近づけようとしているように見える。しかし発表者は次にあげる二つの理由から、ちか子におけるモダンガールとしての性格をより本質的なものと考えたい。第一に、ちか子は英文タイプの技能を持ち、翻訳の手伝いをすると偽っても周囲に疑念をたもたれない程度には、高学歴の女性に設定されていること。第二に、ちか子自身が自らの副業（夜の女）に対して、必ずしも否定的な感情のみを抱いているわけではないこと。夜の女であることを誇るはずはないにしても、苦界に身を沈めた女の悲哀やなし崩しの受動性を強調する表現はほとんどなく、その基本的な生きる姿勢はむしろ堂々としていて、悪びれるところがないとさえ見えるからである。無学であるが、子供に対する愛情だけに溢れているタイプの伝統的な女性像とはその特質において差がある。男を庇護する女侠の強さは母性愛が拡大したものであり、モダンガールの強さとは異なる。結局彼女のバックボーンにあるのは高学歴であり、思想の新しいようなものも感じさせる。小津の描いたちか子の境遇は、単純化されてはいるがきわめて周到なものと言える。このように、近代的な女性像の全てを具え持ったちか子を中心に据え『東京の女』を分析することで、小津が描き出した同時代の女性像・社会像を、とりわけ良妻賢母とモダンガールの具体的な相貌を明らかにする。

注1 D・ボードウェル（杉山昭夫訳）『小津安二郎：映画の詩学』（青土社、1992）397頁。

（みん すら/大阪大学大学院文学研究科美学研究室博士後期課程）

## 2016年ジャン・ミトリ賞を 岡島尚志会員が受賞

小松 弘

北イタリアの小さな町ボルデノーネで無声映画祭 Giornate del cinema muto が始まったのが 1982 年で、爾来一度の中断もなく今日まで毎年この映画祭は続けられている。この映画祭が行われる以前は、世界的にはほとんど知られていなかったこの北イタリアの町は、無声映画のおかげで世界中に知られるようになったといえる。それゆえ、町やこの町が所属する州もこの映画祭を積極的に支援するようになり、無声映画の保存や研究等に貢献した人物を表彰する国際賞を 1986 年に作った。1989 年になってボルデノーネ無声映画祭の初代名誉会長ジャン・ミトリにちなみ、この国際賞にはジャン・ミトリ賞 Premio Jean Mitry という名称がつけられた。

ジャン・ミトリ (1904 年—1988 年) は言うまでもなく、国際的に知られた映画理論家・映画史家であり、またかつては写真家・俳優・映画監督の仕事もした。ジャン・ルノワールの「十字路の夜」(1932 年)には俳優として出演する彼の若き日の姿を見ることができる。名誉会長としてジャン・ミトリはボルデノーネ映画祭に夫人を伴ってきたことがある。筆者の記憶では 1986 年と 1987 年の 2 度、この映画祭を訪れたのではなかったろうか。筆者自身、直接お話を伺う大変貴重な機会を持つことができた。高齢であり、しかも数年前に目の病気を患って視力が衰えていたにもかかわらず、分厚い眼鏡をかけて朝から晩まで無声映画を見続けていた。

ボルデノーネ無声映画祭の国際賞は設立されていたものの、ジャン・ミトリの名称がまだつけられていなかったため、彼が来ていたとはいえ、授賞式に彼が何かをするということはなかったように思う。1986 年の設立当初からこの賞の受賞者は毎年 2 名ずつで、初期には筆者などにとっては伝説的な人物がこうした授賞式にやってきて、ご本人を間近で見ることができるというのも、映画史研究の一学徒には何とも魅力的だった。年月を経て、今では当時の私くらいの年齢の若い映画史学徒が、同じような思いでこのような授賞式を見守っていると想像することは実に楽しい。

2016 年度のジャン・ミトリ賞はフィルムセンターの岡島尚志氏とチェコの映画アーカイヴのウラジーミル・オペラ氏に与えられた。オペラ氏の方は体調が思わしくなく、アーカイヴのスタッフが授賞式に代理出席した。岡島氏は 2009 年から 2011 年にかけて国際フィルムアーカイヴ連盟の会長を務め、映画アーカイヴの国際的な発展のための仕事に寄与したというばかりでなく、日本の古典映画を世界の様々な場所で上映するために惜みない協力をしたことも高く評価された。これは筆者の全く個人的な見解だが、フィルム・アーキヴィストには二通りのタイプがあるように思う。一つはアンリ・ラングロワのようなタイプ。もう一つはアーネスト・リンドグレンのようなタイプだ。岡島氏とオペラ氏は明らかにリンドグレンのタイプであるように思う。10 月 7 日の夜テアトロ・ヴェルディで行われた授賞式において、岡島氏は自分が管理者としての意識を常に持って仕事を続けているという旨の話をしていた。フィルムアーカイヴの管理は外側から見ると内側では恐ろしく困難なところが多々あるに違いない。もちろん予算一つとってもそうだが、それ以外にフィルムの保存や復元というとてもお金のかかる仕事をいかに理性的に行っていくのかということが大切なだろう。そのような意味でも、とりわけ今日において、リンドグレン型の管理者というのがアーカイヴに必要とされるに違いない。もちろんそれは他方で、リンドグレンがそうだったように「憎まれ役」を引き受けざるを得ないということでもあろう。岡島氏のジャン・ミトリ賞受賞を機会に、大海のような過去の映画遺産が「秩序だって」未来へと受け継がなければならないことを、多くの人が再認識することを望む。

(こまつひろし／早稲田大学文学学術院)

## ジャン・ユスターシュによる 映画史—『ナンバー・ゼロ』 における形式の発明を中心に

須藤 健太郎

### ・研究の目的・動機

ジャン・ユスターシュの『ナンバー・ゼロ』(1971)は、監督が自分の祖母にインタビューを敢行し、それを撮影したものである。発表者は以前、本学会誌に掲載された投稿論文において、この作品の製作意図や文化的背景を中心に論じた。本発表は、当該論文において十分に論じることのできなかった映画形式の問題に焦点を絞り、『ナンバー・ゼロ』の美学的射程を明らかにすることを目的とした。

### ・研究の方法

本発表は、画面および画面の連鎖を分析することを主たる方法とした。作品分析をするうえで、まず、これまでの研究による論点を確認し、第二に、監督の発言や関係者の証言をもとに議論を立て直した。

### ・研究の内容・研究したこと

本発表で重要視したのは、先行研究で主張されてきたとは異なり、『ナンバー・ゼロ』が編集を拒絶した作品ではないという点である。ユスターシュは現実の撮影時間と作品の上映時間とを一致させるべく、独自の撮影方法を編み出したのは事実である。だが、ここで意図されていたのは、そればかりではない。なぜなら、ほかならぬ編集によって、作品の上映時間が現実の撮影時間とまったく一致するようにしているからである。撮影方法そのものが、その後に行われる編集をあらかじめ念頭において考案されたものだった。

ユスターシュが『ナンバー・ゼロ』で拒絶したのは「編集」ではなく、編集の技法の一つ「構図／逆構図」である。画面の連鎖を観察すると、対話のシーンが逆構図なしで編集されている点は何より本作の特徴であることが判明する。ユスターシュは想像上の映画史を振り返り、「構図／逆構図」を考えついたのは「ひねくれた精神の持ち主」であると糾弾する。ユスターシュは、本作を「リュミエールへの回帰」と位置付けたが、それはリュミエール兄弟のシネマトグラフの再現を意味するのではなかった。実際は作られることになかったが、作られたかもしれない作品を作ること。いわば可能性の結晶として作品を創造することが本作の眼目なのである。

### ・研究の結論、結果判明したこと

『ナンバー・ゼロ』は、2 台のカメラと 2 台のマイクを組み合わせた独特な撮影方法を編み出し、現実の時間と上映の時間とを一致させる試みである。だが今回の研究の結果判明したのは、本作の試みはその特徴には留まらないということである。本作は編集者でもあったユスターシュ自身の編集観が多分に反映した作品であり、編集に関する考察を通じて練り上げられた、彼の映画史観をそこに読みとることができる。『ナンバー・ゼロ』は単なる家族映画であることを越えて、独自の映画形式の再発明を目的としていたのである。

(すどうけんたろう／明治学院大学非常勤講師)

## 放送用 VTR テープの保存状況 — 2 インチ VTR を中心に

落合 賢一

映像の記録保存はフィルムからはじまり、VTR、デジタル記録へと変遷してきた。このような映像は文化遺産という観点から、長期間の保存を考えていかなければならない。すでにフィルムは100年以上の歴史の中で、常に保存の困難さが問題であった。

その後、登場したVTRも、まだ歴史は浅いが、すでに記録・保存については大きな問題が生じている。電気映像であるVTRはアナログでもデジタル化が容易であり、はじめからデジタル記録の場合もある。これらは他のデジタル記録メディアにコピーすることが容易であることから、記録・保存の問題は無視されがちである。しかし、実際には莫大な量のVTR映像が、存在し、それら全てが保存性の良いデジタルメディアにコピーされることはなく、多くの貴重な映像が失われているであろう。

この研究は、放送用VTRを主に、このようなVTRの記録・保存性の問題点を明らかにし、すでに再生困難な放送用VTRの修復を、行なってみた。

VTRテープはフィルム同様、その保存環境によって記録内容の劣化の程度が異なることがわかった。湿度や温度が問題であることは、フィルムと変わらないが、保存姿勢も問題で、寝かせて保存するとテープが変形し、正常な映像が再生できないことがあることがわかった。高湿度・高温度の環境ではカビが発生することはフィルムと同様である。

このような保存の問題よりも、多様なテープフォーマットが存在することも問題である。放送用に限定しても2インチVTRから始まって、主要なものだけでも、10種以上のものが使われてきた。新フォーマットが登場し、標準化されると、それ以前の機種は製造されなくなり、再生困難となる。VTRはフィルムプロジェクターと違って、複雑な電子回路の集合であるため同様の機器を容易に製造することが困難で、事実上、再生できなくなる。この結果、貴重な映像の喪失につながってしまうと考えられる。

現在の対策としては、現存する機器を少しでも長く維持するのが、唯一の方法であろう。そこで、放送用VTRとして、初めて使用された2インチVTRの修復を試みた。修復した機器は約40年前のもので、長年、倉庫で眠っていたためかなり劣化していた。

こうした機器の修復の鍵は、部品が入手できるかにかかっている。ほとんどの部品は製造が終了しており、部品探しに苦労した。その結果、現状では満足できる状態にすることができた。現在、日本国内で稼働する2インチVTRは、その一台のみ、といわれている。これを使って、NHKに残っていた古い映像を再現することもできた。他にも、このフォーマットのテープが発見された際には、これを使って再生し、少しでも貴重な映像の保存に役立てればと思う。

(おちあいけんいち/日本大学芸術学部放送学科)

## 世界の電子自己出版 — その課題と展望

河合 明

世界のインターネットサイトには様々な*Self-publishing* サイトが存在し、そのサービスが盛んになって来ている。それはジャンルを問わず表現者にとって創造の場を広げるものなのであろうか。その課題と展望について発表を行った。(ちなみに日本では*Self-publishing* を自費出版と訳している場合が多く見受けられるが、従来の所謂自費出版とは性格がことなるので、この発表では*Self-publishing* を自己電子出版と名付けた。またこの言葉はソフトウェア全般を示す一般的な言葉として使用した。従って映画であれば自主制作映画ではなく自己制作映画という名前が適当であろう。)

まず、従来ソフトウェアの制作・販売方法は大きく分けて次の通りである。

- (1) クライアントの企画で発売する。
- (2) 自費出版・自主制作。

前者はメーカーの意向、クライアントの注文にかなう作品を作らなければならない。それは他者性の確立を促進し、自らを成長させるが、同時に自己を抑圧することにもなる。後者は自由に制作が可能だが多額の出版費用がかかる。自己電子出版はそのどちらでもない第3の出版方法である。

電子自己出版には以下、ネット配信によるものと、従来の印刷本、CD、DVDをオンデマンドで提供するものに大別できる。

- (1) ネット配信 (電子書籍、音楽配信、映像配信など)
- (2) オンデマンド出版 (印刷本、CD、DVD、オリジナルデザイン商品 etc)

代表的なサイトとしてCreatespace、LuLu、Smashwords、Webook、Cafepress、Zazzle など多数存在するが、発表者自らがこれらのサイトを利用し、制作したCDと本を例にその特徴について論じたおもな特徴は以下である。

- (A) 誰でも自らの作品を無料または低額で制作・販売できる。
- (B) 著者はいつでも内容を更新できる。絶版や廃盤がない。
- (C) オンデマンド出版の場合、サイトの管理者は購入者から注文があったらその都度、制作 (製作) 販売し、価格から手数料を引いた残りが、制作者に払われる。従って自費制作・自費出版のように制作者が多額の費用を工面する必要もなければ管理者にとって在庫を抱える必要もない。流通の変革である。

これらの特徴から見えてくることは、まずサイト側にプロデューサーや編集者がいるわけではない為、作品ファイルをアップロードすると、誤植などがあっても直ちにamazonなどのサイトで販売が可能になる。ただ内容の更新はいつでも可能なので、あらかじめ完成された作品をアップする必要はない。まずは自己を外界へと参加 (アップロード) し、「関 (間) - 自己」のプロセスで内容を更新し、自己を変化させて行けばよいのである、つまりその都度起きる自己了解型、自己責任型の制作方法なのである。

換言すればクライアント中心主義 (主従関係) でも自己中心主義でもない関係性のなかで創っていくのである。まとめると、「自己電子出版は固定的な執着から自分を開放することと、自分のものではあるが同時に自分のものではない。自分が所有しなくても、ネットワークのどこかに存在している」という感覚が生じる。それは安定した「自己の確立」を求める「自分探し」ではなく、変化は変化のまま世界へ投企する「自分創り」。これを「関 (間) - 共創成」と名付けたい。

(かわいあきら/日本大学芸術学部音楽学科非常勤講師)

2016年11月実施会員アンケートより  
**会員研究テーマ**  
 事務局

◆氏名 (しめいよみ)

所属/専門

- (1) 研究テーマ1
- (2) 研究テーマ2

東部支部

◆阿 金 (あじん)

TV・映画/映像創作・中国語講師・司法通訳  
 (1) 草原と世界旅行の表現  
 (2) 映像と法律

◆相田 アキラ (あいだあきら)

AAP (エー・エー・ピー) 主宰、清里フォトアートミュージアム芸部、日本ウェルネススポーツ大学講師/写真  
 (1) 写真史および写真に基づく文化論ならびに写真評論  
 (2) 現代美術へと昇華した写真と映像表現研究

◆東 英児 (あずま えいじ)

映像表現  
 (1) 映像教育  
 (2) 映像制作

◆東 志保 (あずま しほ)

国際基督教大学/映像研究、比較文化論  
 (1) クリス・マルケルの映像作品の研究  
 (2) フランス語圏の記録映画

◆安部 裕 (あべ ゆたか)

日本大学芸術学部放送学科/映像技術  
 (1) 放送技術の歴史とこれからの発展  
 (2) ドキュメンタリー番組の撮影技術

◆晏 妮 (あん に)

日本映画大学/映画史  
 (1) 日中映画交渉史  
 (2) アジア映画の歴史と現在

◆飯島 泰裕 (いじま やすひろ)

青山学院大学社会情報学部/情報科学  
 (1) 情報社会とライフスタイル

◆井坂 能行 (いさか よしゆき)

岩波映像、自治体映画講師随時/臨床・実践アーカイブ、プロデュース・監督  
 (1) 地域と映画映像—地域を映画にて。映画の活用で地域を。  
 (2) 新しい見方による労働映画—仕事と暮らしを描く—の評価と普及

◆石坂 健治 (いさざ けんじ)

日本映画大学/映画学  
 (1) アジア映画史  
 (2) 日本ドキュメンタリー映画史

◆伊津野 知多 (いづの ちた)

日本映画大学/映画理論、映像論  
 (1) 映画・映像のリアリティについて  
 (2) アンドレ・バザンのリアリズム論について

◆今橋 映子 (いまはし えいこ)

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻(教授)/比較文化論  
 (1) 都市表象と写真  
 (2) フォトリテラシー

◆魚 慧恩 (おへうん)

日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程芸術専攻/映像表現研究  
 (1) 日韓の放送コンテンツにおける海外進出戦略に関する比較研究—ドラマのコンテンツ市場を中心に

◆大久保 博樹 (おおくぼ ひろき)

駿河台大学メディア情報学部/デジタルコンテンツ・マネジメント  
 (1) 効果音の制作と過程における最適化  
 (2) 環境音のイメージによる巨視的検索技術

◆大島 慶太郎 (おおしま けいたろう)

北海道情報大学情報メディア学部/映像表現  
 (1) 動画構造の解体と再構築

◆大城 俊郎 (おおしろ としろう)

東京工芸大学芸術学部(非常勤)/映像  
 (1) 映像技術  
 (2) 企画、ストーリーボード

◆大山 麻里 (おおやま り)

日本工業大学、東京造形大学/映像、インスタレーション  
 (1) 映像  
 (2) インスタレーション

◆荻野 静男 (おぎの しずお)

早稲田大学政治経済学部(政治経済学術院)/芸術学  
 (1) オペラ映画  
 (2) ニュージャーマンシネマ

◆奥野 邦利 (おくの くにとし)

日本大学芸術学部映画学科/映像表現  
 (1) 実験映像とメディアアート  
 (2) 映像メディアの変容とその表現

◆奥村 賢 (おくむら まさる)

いわき明星大学教養学部/映画/映像  
 (1) 映画と政治社会との関係

◆片岡 佑介 (かたおか ゆうすけ)

一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程/映画研究  
 (1) 原爆映画における女性表象について  
 (2) 映画における音声の機能について

◆金子 隆一 (かねこりゅういち)

日本近代写真史  
 (1) 写真雑誌が日本写真史で果たした役割

◆上倉 泉 (かみくら いずみ)

日本大学芸術学部映画学科/映画技術(録音)  
 (1) 映画・映像制作(録音)

◆川崎 賢子 (かわさき けんこ)

日本映画大学/日本映画史  
 (1) 貫戦期日本の映画と諸芸術  
 (2) 昭和モダニズムと映画

◆川崎 公平 (かわさき こうへい)

日本女子大学人間社会学部文化学科/映像論、日本映画研究  
 (1) 戦後日本映画における恐怖

◆かわなか のぶひろ

イメージフォーラム映像研究所/実験映画  
 (1) 実験映画  
 (2) 映画前史

◆北村 匡平 (きたむら きょうへい)

東京大学大学院学際情報学部学際情報学専攻、日本学術振興会特別研究員/映画研究  
 (1) 日本映画における俳優の文化史  
 (2) 戦後日本映画のオーディエンス研究

◆木原 圭翔 (きはら けいしょう)

早稲田大学演劇博物館/映画研究  
 (1) 古典的ハリウッド映画  
 (2) 映画理論

◆KIM, Joon Yang (金俊壤/きむ じゅんやん)

新潟大学人文学部/アニメーション研究  
 (1) アニメーションとメディア・テクノロジー  
 (2) アニメートされる身体

◆GUARIN LEON, Nicolas (ぐありん れおん、にこらす)

東京藝術大学大学院映像研究科映像メディア学専攻/ドキュメンタリー・アニメーション  
 (1) ドキュメンタリーアニメーション  
 (2) 自伝的ドキュメンタリー

◆小岩井 孝 (こいわい たかし)

自営・旅館香蘭荘/映画  
 (1) 有線テレビの番組

◆後藤 典子 (ごとう のりこ)

(株)オー・エル・エム・デジタル/アニメーション  
 (1) アニメーション制作技術の変遷

◆近藤 耕人 (こんどう こうじん)

明治大学名誉教授/英文学、映像学  
 (1) アイルランドをめぐる肉と言葉  
 (2) 映像と身体存在論

◆佐伯 知紀 (さいき ともり)

映像産業振興機構/映画・アニメーション  
 (1) 映画史  
 (2) 映画映像政策

◆斉藤 綾子 (さいとう あやこ)

明治学院大学文学部芸術学科/映画研究  
 (1) 戦後日本映画ジェンダー表象  
 (2) 情動、メロドラマ論

## ◆氏名 (しめいよみ)

### 所属/専門

- (1) 研究テーマ1
- (2) 研究テーマ2

### ◆斎藤 恵 (さいとう めぐみ)

大妻女子大学家政学部/音楽  
 (1) 音楽教育、音楽と季節  
 (2) 音楽美学、音楽と映像・絵画

### ◆坂尻 昌平 (さかじり まさひら)

自由業・映画研究者/映画・映像研究  
 (1) フランス映画、日本映画研究  
 (2) 映像全般の過去・現在・未来の考察

### ◆坂本 佳子 (さかもと よしこ)

脚本  
 (1) 脚本  
 (2) 向田邦子研究

### ◆佐々木 悠介 (ささき ゆうすけ)

東京大学 (非常勤) / 仏語圏・英語圏の写真論  
 (1) 20世紀仏語圏・英語圏における写真言説

### ◆佐相 勉 (さそう つとむ)

日本映画史  
 (1) 溝口健二

### ◆佐藤 博昭 (さとう ひろあき)

日本大学、武蔵大学、日本工学院専門学校/映像教育  
 (1) 映像教育とシルバービジネスとしてのロック  
 (2) 個人映像、市民映像の発見、評価方法の研究

### ◆佐藤 由紀 (さとう ゆき)

玉川大学リベラルアーツ学部/認知科学/演技  
 (1) 俳優の演技構造

### ◆シェアマン, スザンネ

明治大学/映画学  
 (1) 映画館の歴史

### ◆柴崎 敦 (しばさき あつし)

映像教育  
 (1) 映像教育

### ◆島 啓一 (しま けいち)

根津映画倶楽部/小型映画  
 (1) 8mmフィルムを中心とした小型映画の保存・活用

### ◆白井 佳夫 (しらい よしお)

日本文芸家協会/映画評論  
 (1) 黒白スタンダード画面時代の日本映画、外国映画  
 (2) 黒澤明研究

### ◆杉田 このみ (すぎた このみ)

千葉商科大学政策情報学部/映像表現  
 (1) 地域をテーマにした映像制作  
 (2) ドキュメンタリードラマ

### ◆鈴木 孝史 (すずき たかふみ)

日本大学芸術学部写真学科/写真  
 (1) 写真制作技術  
 (2) 美術館運営

### ◆須藤 定夢 (すどう さだむ)

東京国際大学国際関係学部/映像制作  
 (1) 映像制作、3DCG  
 (2) デジタルアーカイブ

### ◆住本 賢一 (すみもと けんいち)

東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻/美学芸術学、映画研究  
 (1) ハリウッド映画の語りの透明性や自意識の問題を古典期から現代までの流れの中で捉える  
 (2) デヴィッド・ボードウェルの映画理論の射程を再考する

### ◆瀬島 久美子 (せじま くみこ)

日本大学芸術学部映画学科/映像論  
 (1) 映像論及び映像論展開のための情報・記号解析

### ◆高橋 恭子 (たかはし きょうこ)

早稲田大学政治経済学術院/映像ジャーナリズム  
 (1) 次世代ジャーナリズム  
 (2) メディア・リテラシー

### ◆高橋 秀樹 (たかはし ひでき)

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科/映像制作  
 (1) 発達障害  
 (2) 北朝鮮映画史

### ◆高山 隆一 (たかやま りゅういち)

東京工芸大学芸術学部映像学科/映画史  
 (1) 映画制作教育の方法論

### ◆武井 基純 (たけい もとずみ)

(株)野村総合研究所/経営戦略  
 (1) 映像ビジネスにおける事業戦略、および経営戦略

### ◆竹内 正人 (たけうち まさと)

立教大学文学部 (兼任講師) / 映像教育  
 (1) 比較表現 (映像と能)  
 (2) 文化情報

### ◆武田 潔 (たけだ きよし)

早稲田大学文学学術院/映画理論  
 (1) 映画とその分身  
 (2) フランス映画言説史

### ◆田島 良一 (たじま りょういち)

日本大学芸術学部映画学科/日本映画史  
 (1) 大映倒産後の永田雅一

### ◆趙 陽 (ちょう よう)

北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻/映画  
 (1) エドワード・ヤン映画研究

### ◆築地 正明 (つきじ まさあき)

立教大学/映像・哲学  
 (1) 映像、身体、記憶、言語についての研究  
 (2) 芸術文化研究

### ◆津田 雄二 (つだ ゆうじ)

TBOX (自営) / CM 映像  
 (1) 広告映像、広告研究  
 (2) ヒッチコック研究、など

### ◆土屋 昌明 (つちや まさあき)

専修大学経済学部/中国文学  
 (1) 中国の現代史を扱ったドキュメンタリー  
 (2) 中国思想史

### ◆戸田 昌子 (とだ まさこ)

武蔵野美術大学 (美学美術史) / 写真史  
 (1) モダニズムを中心とした日本写真史

### ◆友田 義行 (ともだ よしゆき)

信州大学/日本近代文学、映画  
 (1) 映画と文学の比較研究  
 (2) 勅使河原宏研究

### ◆鳥山 正晴 (とりやま まさはる)

日本大学芸術学部映画学科/映画演出  
 (1) 映画演出

### ◆中垣 恒太郎 (なかがき こうたろう)

大東文化大学/アメリカ文化、比較メディア研究  
 (1) ドキュメンタリー表現の変容  
 (2) 医療表象をめぐる比較メディア研究

### ◆中島 崇 (なかじま たかし)

東京造形大学 (非常勤) / 映像制作  
 (1) エクスペリメンタル、デジタル映像の歴史研究

### ◆中村 秀之 (なかむら ひでゆき)

立教大学現代心理学部映像身体学科/映画研究  
 (1) 映画と社会階級  
 (2) 映画の言語哲学

### ◆仲村 浩 (なかむら ひろし)

(株)電通テック、東京工芸大学/広告メディア  
 (1) 広告映像  
 (2) 展示映像

### ◆中山 信子 (なかやま のぶこ)

早稲田大学演劇博物館招聘研究員/映画史  
 (1) 日仏映画交流史

### ◆名手 久貴 (なて ひさき)

東京工芸大学芸術学部映像学科/視覚  
 (1) 3Dディスプレイ観察時の視覚特性

### ◆難波 阿丹 (なんば あんに)

上智大学グローバル教育センター特別研究員、早稲田大学/映像メディア研究  
 (1) メディア研究  
 (2) 映画理論

### ◆仁井田 千絵 (にいだけ ちえ)

早稲田大学国際教養学部/映画学  
 (1) アメリカ映画史  
 (2) 音響メディア史

## ◆野口 光一 (のぐち こういち)

東映アニメーション(株) / CG

- (1) 日本アニメの成立と変容にみる日米文化関係

## ◆野地 朱真 (のじすま)

尚美学園大学芸術情報学部情報表現学科 / コンピュータ・グラフィックス

- (1) 都市空間に融合する映像コンテンツの開発
- (2) CGを用いたアート表現に関する研究

## ◆信岡 朝子 (のぶおか あさこ)

東洋大学文学部日本文学文化学科 / 比較文学、クロスジャンル研究

- (1) ネイチャーフォトなど環境表象の研究 (主に日米)

## ◆野村 建太 (のむら けんた)

日本大学芸術学部映画学科 / 実験映像、アニメーション

- (1) 実験映像
- (2) アニメーション

## ◆波多野 哲朗 (はたの てつろう)

東京造形大学名誉教授 / 映像学

- (1) 映像と諸芸術との関係
- (2) ニューメディアと映像

## ◆羽鳥 隆英 (はとり たかふさ)

新潟大学人文学部 / 映画研究

- (1) 新国劇
- (2) 李香蘭

## ◆濱口 幸一 (はまぐち こういち)

映画史

- (1) ナショナル・フィルモグラフィ

## ◆播磨 徹 (はりま とおる)

千葉商科大学 / 映像技術

- (1) 映像技術と表現
- (2) メディア

## ◆平野 共余子 (ひらの きょうこ)

フリー・ライター / 映画史

- (1) 映画上映
- (2) 東欧映画

## ◆昼間 行雄 (ひるま ゆきお)

文化学園大学造形学部 / 映像技術

- (1) 映像技術
- (2) 映像の教育と教育普及

## ◆廣澤 文則 (ひろさわ ふみのり)

日本大学芸術学部映画学科 / 映画技術 (撮影)

- (1) 映画技術史
- (2) カラー映画史

## ◆FEDOROVA, Anastasia (ふいおーどろわあなすたしあ)

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター / 映画学

- (1) 日ロ映画交流史、日ロ比較映画史
- (2) 独立プロ映画研究

## ◆福田 淳子 (ふくだ じゅんこ)

昭和女子大学人間社会学部現代教養学科 / 日本近代文学

- (1) 日本近代文学における他芸術との影響関係の考察
- (2) 川端康成を中心とした日本の近現代作家および作品研究

## ◆藤井 仁子 (ふじい じんし)

早稲田大学文学学術院 / 映画学

- (1) 現代アメリカ映画と民主主義
- (2) トーキー化以降の日本映画研究

## ◆ほしの あきら

多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科 / 映像制作

- (1) 8m/m と 16m/m フィルムの持つ表現域の可能性
- (2) 映画表現の歴史 (作家作品) が示す創造の精神

## ◆星野 裕 (ほしの ゆたか)

日本大学芸術学部放送学科 / 放送広告 (CM)

- (1) 広告表現における映像の変遷

## ◆堀江 秀史 (ほりえ ひでふみ)

学習院女子大学 (非常勤) / 比較芸術論

- (1) 寺山修司
- (2) クロスジャンル論

## ◆正清 健介 (まさきよ けんすけ)

一橋大学大学院言語社会研究科言語社会専攻 / 映画音響論

- (1) 小津安二郎映画における音—音楽・雑音・言葉

## ◆増田 玲 (ますだ れい)

東京国立近代美術館美術課 / 写真史

- (1) 日本の戦後写真史

## ◆松本 俊夫 (まつもと としお)

作家、評論家

- (1) 芸術的斬新さと深さ

## ◆丸山 友美 (まるやま ともみ)

法政大学大学院、法政大学 (兼任) / メディア史

- (1) 放送アーカイブを活用したテレビ・ドキュメンタリーに关するメディア論的研究
- (2) JOBK のメディア史研究

## ◆水野 雄太 (みずの ゆうた)

(株) メディア・デザイン研究所 / 映像理論

- (1) 映像における解像度の人文学的研究

## ◆三塚 義隆 (みつか よしたか)

写真史・写真論

- (1) 日本写真史 (特に 1950 年代から 70 年代)
- (2) 写真論

## ◆三橋 純 (みつはし じゅん)

横浜美術大学 / 写真・映像

- (1) 写真表現の変容〜「私」をめぐる〜
- (2) 映像メディア論〜表象・身体・メディア〜

## ◆水口 紀勢子 (みなぐち きせこ)

帝京大学外国語学部 / 映画学

- (1) 観客論
- (2) 占領期映画

## ◆宮崎 淳 (みやざき じゅん)

東京造形大学造形学部デザイン学科 / 映像

- (1) 実験映画
- (2) 画質 / 画調の創出と調整

## ◆宮田 徹也 (みやた てつや)

批評

- (1) 日本の実験映像
- (2) コラボレーションの可能性

## ◆三輪 健太郎 (みわ けんたろう)

東京工芸大学芸術学部、フェリス学院大学文学部 (非常勤講師) / 表象文化論

- (1) 近代視覚文化史におけるマンガの位置づけの理論化

## ◆村山 匡一郎 (むらやま きょういちろう)

日本大学大学院芸術学研究科 / 映画

- (1) ドキュメンタリー映画史

## ◆元村 直樹 (もとむら なおき)

早稲田大学基幹理工学部 / 映画・映像

- (1) 映画・映像創作論
- (2) 映画・映像教育

## ◆守安 敏久 (もりやす としひさ)

宇都宮大学教育学部 / 日本近代文学

- (1) 映画と文学の相互影響の研究
- (2) 寺山修司研究

## ◆山本 祐輝 (やまもと ゆうき)

立教大学大学院現代心理学研究科映像身体学専攻博士課程後期課程 / 映画研究

- (1) ロバート・アルトマン映画における音声のナラトロジーの研究

## ◆翁 良根 (ゆやんくん)

Sosang University (西江大学) / 日本映画

- (1) 日本映画と日本文化
- (2) 日本映画監督論

## ◆李 仙姫 (りーせんひ)

エスアンドエス(株) / 映像表現様式

- (1) Video アート Nam June Paik 作品研究

## ◆李 容旭 (りょううく)

東京工芸大学芸術学部映像学科映像造形領域 / 映像

- (1) 電子メディア時代の映像表現と可能性
- (2) 映像と美術の関係

## ◆劉 文兵 (りゅうぶんべい)

早稲田大学教育学部 / 映画論

- (1) 日中映画交流史
- (2) 他者の映画表象

## ◆氏名 (しめいよみ)

### 所属/専門

(1) 研究テーマ1

(2) 研究テーマ2

## 関西支部

### ◆青山 勝 (あおやま まさる)

大阪成蹊大学芸術学部/視覚文化論

(1) 写真黎明期の諸言説

(2) 現代における「ドキュメンタリー」写真の展開

### ◆安部 孝典 (あべ たかのり)

関西学院大学非常勤講師/映画

(1) 映画論

### ◆池側 隆之 (いけがわ たかゆき)

京都工芸繊維大学デザイン・建築学系/映像デザイン

(1) 映像を媒介とした統合型コミュニケーションデザイン研究

(2) デザイン方法論と映像ドキュメンテーションに関する研究

### ◆石塚 洋史 (いしづか ひろし)

近畿大学文学部非常勤講師/映画

(1) 日本映画におけるプログラム・ピクチャー

### ◆伊奈 新祐 (いな しんすけ)

京都精華大学芸術学部/映像芸術、メディアアート

(1) モーション・グラフィックスの歴史

(2) 実験映像とメディアアート

### ◆犬伏 雅一 (いぬぶせ まさかず)

大阪芸術大学芸術学部芸術計画学科/美学・視覚文化研究

(1) 戦後韓国写真

(2) 中国写真史とアジア

### ◆岩城 覚久 (いわき あきひさ)

近畿大学文学部/感性学

(1) 感性とテクノロジー

### ◆江本 紫織 (えもと しおり)

九州大学大学院人文科学府人文基礎専攻芸術学専修/写真論

(1) 写真のリアリティに関する理論的研究

### ◆太田 純貴 (おおた よしたか)

鹿児島大学法文学部/美学芸術学・メディア論

(1) タイムマシン/タイムトラヴェル概念作品の分析

(2) メディア考古学の理論的・歴史的展開の分析

### ◆大橋 勝 (おおはし まさる)

大阪芸術大学映像学科/実験映像

(1) 前衛映画・実験映画の作品研究

(2) 現代美術における映像

### ◆大森 康宏 (おおもり やすひろ)

国立民族学博物館(名誉教授)/文化人類学、映像人類学

(1) デジタル映像のアーカイブズについて

### ◆岡川 卓詩 (おかがわ たくじ)

広島国際学院大学情報文化学部情報デザイン学科/メディア・アート

(1) メディアアートの作品制作

### ◆小川 丈治 (おがわ じょうじ)

ドキュメンタリーの企画・制作

(1) ドキュメンタリーにおける「やらせ」の問題、他

### ◆加藤 哲弘 (かとう てつひろ)

関西学院大学文学部/美学

(1) イコノロジー

(2) 美術史学者たちの映像論

### ◆亀井 克朗 (かめい かつろう)

(株)JSL インターナショナルカレッジ講師/映画美学

(1) 映画作品の現象学的研究

(2) アンドレイ・タルコフスキーの作品研究

### ◆菅野 優香 (かんの ゆうか)

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科/視覚文化研究

(1) クリア映画理論・批評

(2) 視覚文化研究

### ◆桑原 圭裕 (くわばら よしひろ)

関西学院大学文学部/アニメーション、映画

(1) アニメーション理論

(2) アンサンブルフィルム研究

### ◆小山 泰三 (こやま たいぞう)

藝術文化雑誌編集顧問/美術全般

(1) 絵画と写真との間

### ◆雑賀 広海 (さいか ひろみ)

京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程共生人間学専攻/映画

(1) アクション映画における身体表象

(2) ジャッキー・チェンと香港映画

### ◆新堀 孝明 (しんぼり たかあき)

一般財団法人大阪教育文化振興財団キッズプラザ大阪(チルドレンズ・ミュージアム)/メディア・アート

(1) 科学技術を用いた、子どもの教育に関するアートワークショップの研究

### ◆末永 航 (すえなが こう)

美術史

(1) 都市と映画

### ◆千光士 義和 (せんこうじ よしかず)

嵯峨美術短期大学/アニメーション

(1) 立体アニメーションの造形

(2) 動くダンボールアート

### ◆田之頭 一知 (たのがしら かずとも)

大阪芸術大学芸術学部/美学・音楽哲学

(1) 映画音楽の研究

(2) 間(ま)と時間の研究

### ◆長久保 光弘 (ながくぼ みつひろ)

宝塚大学造形芸術学部/立体映像、CG

(1) 立体映像における得意な視覚表現

(2) CG、ゲーム

### ◆長門 洋平 (ながと ようへい)

国際日本文化研究センター/映画学

(1) 映画の音響

(2) 溝口健二研究

### ◆中村 聡史 (なかむら さとし)

関西学院大学(非常勤講師)/映画

(1) 日本映画

(2) アメリカ映画

### ◆萩原 由加里 (はぎはら ゆかり)

立命館大学(非常勤講師)/アニメーション

(1) アニメーション史

(2) 映像文化史

### ◆橋本 英治 (はしもと えいじ)

神戸芸術工科大学芸術工学部まんが表現学科/映像理論

(1) 視線追跡とそのリテラシー

(2) デジタルデバイスのプログラム開発

### ◆橋本 啓子 (はしもと けいこ)

近畿大学建築学部/デザイン史

(1) 日本の商業インテリア史

### ◆長谷川 功一 (はせがわ こういち)

京都情報大学院大学/映画研究

(1) アメリカ映画と自動車

(2) 日本映画と近代文学

### ◆濱口 栄 (はまぐち さかえ)

日本写真映像専門学校/映画

(1) 映画シナリオ

### ◆福原 正行 (ふくはら まさゆき)

花園大学創造表現学科/コンテンツ論

(1) コンテンツ論

(2) バーレスク・ダンス及びパフォーマンスの研究

### ◆堀 潤之 (ほり じゅんじ)

関西大学文学部映像文化専修/映画研究・表象文化論

(1) ジャン＝リュック・ゴダールの映像作品の研究

(2) アンドレ・バザンを中心とするフランス映画批評史研究

### ◆前川 修 (まえかわ おさむ)

神戸大学大学院人文学研究科/芸術学

(1) 写真論



## ◆松本 夏樹 (まつもと なつき)

大阪芸術大学、武蔵野美術大学、立命館大学（非常勤講師）／映像文化史  
 (1) 幻燈、初期映像機器、玩具映画、小型映画機器  
 (2) 宗教図像史、メディア考古学

## ◆真鍋 公希 (まなべ こうき)

京都大学大学院人間・環境学研究所共生人間学専攻／社会学  
 (1) 視覚効果（特殊撮影）の変容について

## ◆水口 薫 (みずぐち かおる)

榊原中舎伊藤組／映画史、映像制作  
 (1) 子ども映画  
 (2) アニメーション制作技法

## ◆孟 祥宇 (もうしょうう)

京都精華大学マンガ学部アニメーション学科（非常勤）／映像、メディアアート、3DCG  
 (1) 3D バーチャル空間における映像オブジェクトについて

## ◆MONNET, Livia (もねりうゝいあ)

Dept. of Literature Comparee, University of Montreal / 日本映画、アニメーション  
 (1) エコシネマ、映画・映像メディアとエコクリティシズム  
 (2) SF アニメーション

## ◆矢澤 利弘 (やざわ としひろ)

県立広島大学経営情報学部経営学科／映像ビジネス  
 (1) 映画祭のマネジメント  
 (2) イタリア映画史

## ◆山縣 照 (やまがた ひろし)

神戸大学名誉教授／芸術学  
 (1) 映像原論

## ◆山下 万吉 (やました まんきち)

岡山県立大学デザイン学部造形デザイン学科／映像デザイン  
 (1) 映像による地域振興  
 (2) 映像を用いた日本語学習教材

## ◆横濱 雄二 (よこはま ゆうじ)

甲南女子大学文学部日本語日本文化学科／日本現代文学、映像文化  
 (1) 日本のアニメーションを中心としたメディアミックス  
 (2) ミステリー映画

## ◆吉川 直哉 (よしかわ なおや)

写真芸術  
 (1) 写真芸術  
 (2) 芸術文化

## ◆吉田 馨 (よしだ かおる)

大阪大学大学院文学研究科アートメディア論コース／日本映画  
 (1) 三隈研次監督  
 (2) 京都で製作された映画

## ◆吉村 健一 (よしむら けんいち)

大阪電気通信大学、神戸大学（非常勤）／美学・芸術学  
 (1) 芸術の社会存在論的構造  
 (2) 視覚文化史

## ◆米正 万也 (よねしょうまや)

京都精華大学 Studio Film Bilder / アニメーション  
 (1) 実験アニメーション

## 中部支部

## ◆伊藤 明倫 (いとう あきひと)

名古屋学芸大学、他／メディアアート、メディアデザイン  
 (1) 情動についての考察と制作

## ◆伊藤 仁美 (いとう まさみ)

Art Media Room / 映像表現  
 (1) 映像インスタレーション（映像と様々なオブジェクトを用いた空間表現の制作と研究）

## ◆稲垣 拓也 (いながき たくや)

名古屋学芸大学映像メディア学科／視覚文化  
 (1) AR を利用した展示会の体験の記録について  
 (2) ヴィジュアルリテラシーと写真に関して

## ◆今井 瞳良 (いまいつぶら)

茨木市立川端康成文学館／映画学  
 (1) 映画における団体表象  
 (2) ハンセン病表象

## ◆大泉 和文 (おおいずみ かずふみ)

中京大学工学部メディア工学科／インスタレーション  
 (1) コンピュータ・アート史  
 (2) インスタレーション・アート

## ◆小倉 史 (おぐら ふみ)

愛知淑徳大学メディアプロデュース学部／映画史  
 (1) 戦後日本の風俗映画に観る戦争記憶について  
 (2) 映像表現と文学・シナリオとの比較・検討

## ◆梶原 克教 (かじはら かつのり)

愛知県立大学外国語学部英米学科／表象文化  
 (1) 映像理論  
 (2) 比較文化

## ◆合木 梢 (ごうき こずえ)

(株) 塩尻劇場 - 東座 / 映画館経営  
 (1) 昭和の香りがする映画館を存続させる

## ◆中根 若恵 (なかね わかえ)

名古屋大学大学院文学研究科博士課程／映画学  
 (1) ドキュメンタリー映画  
 (2) 女性の映画制作への参入

## ◆名取 雅航 (なとり まさかず)

名古屋大学大学院文学研究科博士課程／映画学  
 (1) 日本映画における男性表象

## ◆西村 和泉 (にしむら いづみ)

名古屋芸術大学／フランス文学  
 (1) 20 世紀フランス文学  
 (2) サミュエル・ベケット

## ◆伏木 啓 (ふしき けい)

名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア学科／映像表現、メディアアート  
 (1) 映像作品の制作及び研究  
 (2) 映像インスタレーション、メディアパフォーマンス作品の制作及び研究

## ◆馬 定延 (まじょうん)

多摩美術大学／映像メディア学  
 (1) 映像メディア学  
 (2) 現代アート

## ◆山口 良臣 (やまぐち よしおみ)

映像表現  
 (1) 装置と美術表現

## 西部支部

## ◆有吉 未充 (ありよし すえみつ)

京都学園大学（非常勤）、立命館大学（非常勤）／アニメーション  
 (1) アニメーション  
 (2) メディアリテラシー

## ◆伊藤 高志 (いとう たかし)

九州産業大学芸術学部芸術表現学科メディア芸術専攻／実験映像  
 (1) 実験的映像表現の可能性

## ◆井上 貢一 (いのうえ こういち)

九州産業大学芸術学部／情報デザイン  
 (1) 電子媒体における情報デザイン  
 (2) ソーシャルデザイン

## ◆瓜生 隆弘 (うりゅう たかひろ)

近畿大学九州短期大学／情報伝達  
 (1) 情報の伝達に関すること  
 (2) CG デザイン制作

## ◆佐藤 慈 (さとう しげる)

九州産業大学芸術学部写真・映像メディア学科／画像工学  
 (1) 映像表現における画質の印象効果  
 (2) 映像メディアを活用した地域振興

## ◆杉本 達應 (すぎもと たつお)

佐賀大学芸術地域デザイン学部／情報デザイン  
 (1) 表現ワークショップのためのシステム開発  
 (2) データ可視化の技術文化史

## ◆中村 滋延 (なかむら しげのぶ)

九州大学名誉教授／音楽  
 (1) 映画の音  
 (2) 映像アート

## ◆BOULBÈS, Jérôme (ぶるべす じゅろーむ)

九州産業大学芸術学部 / 3DCG メディア  
 (1) 3DCG  
 (2) モーションキャプチャー

## ◆脇山 真治 (わきやま しんじ)

九州大学大学院芸術工学研究院／マルチ映像  
 (1) マルチ映像のコミュニケーション特性  
 (2) 展示映像の記録・保存

# 日本映像学会第43回大会 第2通信

大会実行委員会

## I. 大会概要

1. 大会テーマ：宇宙×映像
2. 会場：神戸大学（六甲台第二キャンパス）農学部
3. 会期：2017年6月3日（土）・4日（日）
4. プログラム（予定）
  - 第1日：6月3日（土）12:30～19:30  
基調講演・シンポジウム（内容・登壇者未定）  
懇親会（神戸大学瀧川記念会館）
  - 第2日：6月4日（日）10:00～18:00  
研究発表・作品発表  
理事会・第44回通常総会
5. 大会参加費（2日間通し）
  - 会員 3,000円、一般 2,000円、  
大学生・大学院生 1,000円  
懇親会費：5,000円（予定）  
2日目の昼食券：500円  
（※予定：事前申し込み制）

※プログラムの詳細は、大会ホームページおよび「第3通信」（5月初旬）にてお知らせいたします。

## II. 大会研究発表・作品発表申込要領

- ①各発表の申込資格は、2016年度在籍会員に限らせていただきます。なお、年会費の未納・滞納のなきようお願い致します。
- ②各発表は学会の趣旨にそぐわない場合、あるいは技術的な理由などで対応し兼ねる場合にはお断りすることがあります。
- ③各発表は日本映像学会理事会（2017年3月18日（土）開催予定）において承認の上、大会実行委員会として正式に受理致します。
- ④発表を希望される方は、所定の申込書を郵送・ファックス・メールのいずれかで日本映像学会第43回大会実行委員会までお送りください。
- ⑤必要事項に不備のある場合や申込資格のない場合は無効になります。
- ⑥各発表の申込期日は、理事会開催の都合上、2017年2月24日（金）必着と致します。
- ⑦理事会承認後に正式受理の可否についてご連絡致します。
- ⑧正式受理の場合、発表概要原稿（2000字、MS-Wordファイル）を2017年4月21日（金）までにご提出ください。正式受理者には発表概要書式をお送りします。

## III. 大会への出欠はがきの送付

参加のみの出席なのか、研究・作品発表もおこなうのか、1月中旬発送予定のペーパー版第2通信に同封のはがきに必要事項を記入し、切手を貼らずに投函してください。必着日厳守をお願いいたします。

## IV. 大会研究発表・作品発表申込方法

- ①1月中旬発送予定のペーパー版第2通信に同封の申込用紙に手書きで記入し郵送する場合の送り先（封筒・郵送料はご自身でご負担願います。）  
〒657-0013 兵庫県神戸市灘区六甲台町1-1  
神戸大学人文学研究科  
日本映像学会第43回大会実行委員会行
- ②1月中旬発送予定のペーパー版第2通信に同封の申込用紙をFAXで送る場合の送り先  
FAX：078-803-7453
- ③申込用紙を大会HPからダウンロードし、メール添付で送る場合  
大会HP：http://jasias.jp/2017main  
大会実行委員会メールアドレス  
jasias2017@harbor.kobe-u.ac.jp  
※1週間以内に受領のメールを差し上げます。受領の連絡がない場合は、上記のFAX（078-803-7453）にてお問い合わせください。
- ④直接メールで送る場合は、申込用紙の項目に従って必要事項を記入し、大会実行委員会メールアドレスにお送りください。

申込締切 2月24日（金）必着厳守

## V. 発表時間・使用機材

- ①〔発表時間〕：研究発表・作品発表の時間は25分、質疑応答を5分とします。

# 編集後記

総務委員会

■新春の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。2017年の新年号となる177号（電磁版）をお届けいたします。■会報も年を追うごとに厚みを増し充実した内容となっております。これも、日頃の学会会員の皆様の積極的な活動の賜物であり、ここに厚く御礼申し上げます。■今年の第43回全国大会は神戸大学で6月3日、4日に行われます。兵庫県での開催は関西学院大学以来11年ぶりとなります。前川修大会委員長の指揮のもと関西支部の協力準備は着々と進んでおります。大会テーマは「宇宙×映像」と壮大な大会となると予想されます。奮ってご参加ください。（橋本）

- ②〔使用機材〕：研究発表・作品発表には、DVD、ブルーレイ、VHS、OHPなどが使用可能です。ご持参されるパソコンを接続するVGA接続端子は教卓に設置されていますが、接続用アダプタは発表者ご自身でご用意ください。またフィルム（8mm、16mm）やDVテープの上映に關することなど、詳細はメールにて事前にご相談ください。

## 日本映像学会 第43回 大会実行委員会

- 実行委員長： 前川修（神戸大学）  
副実行委員長： 板倉史明（神戸大学）  
実行委員（50音順）： 遠藤賢治（大阪芸術大学）  
大橋勝（大阪芸術大学）  
加藤哲弘（関西学院大学）  
桑原圭裕（関西学院大学）  
豊原正智（大阪芸術大学）  
中村聡史（関西学院大学）  
橋本英治（神戸芸術工科大学）

実行委員会事務局 〒657-0013 兵庫県神戸市灘区六甲台町1-1  
神戸大学人文学研究科  
日本映像学会第43回大会実行委員会  
〔TEL〕078-881-1212（大代表）  
〔FAX〕078-803-7453  
〔E-MAIL〕jasias2017@harbor.kobe-u.ac.jp  
〔大会HP〕http://jasias.jp/2017main

- 交通案内 空港／新幹線の駅から最寄り駅まで
  - ・大阪空港から：大阪モノレール「大阪空港」→（約3分）→「蛸池」【阪急宝塚線に乗り換】「蛸池」→（約15分）→「十三」【阪急神戸線に乗り換】「十三」→（約25分）→「六甲」
  - ・関西国際空港から：JR「関西空港」→（約1時間）→「大阪」【JR神戸線に乗り換】「大阪」→（約25分）→「六甲道」
  - ・神戸空港から：神戸新交通ポートアイランド線「神戸空港」→（約17分）→「三宮」【阪急神戸線に乗り換】「神戸三宮」→（約6分）→「六甲」
  - ・新大阪駅から：JR「新大阪」→（約26分）→神戸線「六甲道」
  - ・新神戸駅から：神戸市営地下鉄西神・山手線「新神戸」→（約2分）→「三宮」【阪急神戸線に乗り換】「神戸三宮」→（約6分）→「六甲」
- 最寄り駅からキャンパスまで  
会場：神戸大学（六甲台第二キャンパス）農学部  
（〒657-0013 神戸市灘区六甲台町1-1）
  - ・JR「六甲道」駅下車、神戸市バス36系統「鶴甲団地」行き約10分「神大文農農学部前」（5つめ）下車すぐ
  - ・阪急「六甲」駅下車、神戸市バス36系統「鶴甲団地」行き約7分「神大文農農学部前」（3つめ）下車すぐ
 ※委細は神戸大学HP「交通アクセス」をご覧ください。  
http://www.ans.kobe-u.ac.jp/nougakubu/access.html  
※駐車場はありませんので、公共の交通機関をご利用ください。

